(財)米子市教育文化事業団
文化財報告書 15

米子城跡7遺跡

郷土資料

1996.3
財団法人　米子市教育文化事業団

序

米子城跡のあります市街地は、都市開発が増加の一途をたどる今日的状況の中で、埋蔵文化財の保護、保存と諸々の開発との調和を図るため、この数年来発掘調査を実施してまいりました。

この度報告致します米子城跡７遺跡は、米子駅境線加茂町沿道土地区画整理事業に伴って発掘調査を実施したもので、弥生時代～江戸時代の遺物、遺構を検出しました。調査の成果はさることながら、なかでも特に木簡は、江戸時代の流通を考えるうえで、大変貴重な資料となるものと思われます。

これらの資料が今後の調査研究の一助となり、本報告書が多方面にわたって広く活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、調査に際しましては、多大なご理解とご協力をいただきました地元の方々をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました調査従事者並びに関係各位に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成８年３月

財団法人米子市教育文化事業団

理事長　森　田　隆　朝

例　　言

1　本書は平成６年８月～12月、平成７年６月に発掘調査を実施した米子駅境線加茂町沿道土地区画整理事業区画道路新設工事に伴う米子城跡７遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は米子市公園街路課の委託を受けて（財）米子市教育文化事業団が実施した。

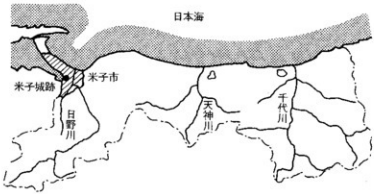
3　本書は高橋浩樹が執筆、編集した。

4　本書に用いた遺構の表示はＳＡ：塀、ＳＢ：建物跡、ＳＥ：井戸、ＳＤ：溝、ＳＫ：土坑である。

5　本書に用いた方位は磁北で、高度値は標準海抜高度である。

6　第１図は国土地理院発行の１：2,500の米子・境港都市計画計画図（米子市）27を複製、縮小し、加筆したものである。

7　出土遺物、実測図、写真等は米子市教育委員会で保管している。



目　　次

1　調査の契機……1
2　位置と環境……1
3　調査の概要……7
4　検出遺構……7
　1　区……7
　2　区……9
　3　区……11
　4　区……14
5　出土遺物……18
6　ま　と　め……51

図　版　目　次

図版1　ＳＥ－０１
　　ＳＥ－０３
　　ＳＥ－０４
図版2　ＳＫ－４７
　　ＳＫ－４７遺物出土状況
　　木簡出土状況
図版3　ＳＫ－４６遺物出土状況
　　ＳＫ－４６完掘
　　ＳＤ－３８
図版4　ＳＢ－０１とＳＡ－０１
　　ＳＢ－０１
　　ＳＡ－０１
図版5　伊万里（17世紀）
　　伊万里（18世紀～幕末）
図版6　唐津
　　志野・清水系・石見・布志名
図版7　擂鉢
　　焙烙・瓦質土器
図版8　かわらけ
　　弥生土器
図版9　須恵器・土師質土器
　　軒瓦
図版10　木簡（表）
　　木簡（裏）

挿　図　目　次

第１図　調査地及び周辺遺跡分布図（１／5,000）…… 2
第２図　屋敷の変遷模式図…… 3
第３図　調査区配置図（１／2,000）…… 4
第４図　地籍図と屋敷境界（１／2,000）…… 4
第５図　遺構配置図（１／200）…… 5～6
第６図　ＳＥ－０１実測図（１／10）…… 8
第７図　ＳＤ－３８実測図（１／40）…… 12
第８図　ＳＫ－４６遺物出土状況図・実測図（１／20）…… 13
第９図　ＳＥ－０３実測図（１／20）…… 15
第10図　ＳＥ－０４実測図（１／20）…… 16
第11図　ＳＫ－４７実測図（１／20）…… 17
第12図　伊万里実測図（１／３）…… 29
第13図　伊万里実測図（１／３）…… 30
第14図　伊万里実測図（１／３）…… 31
第15図　伊万里実測図（１／３）…… 32
第16図　伊万里実測図（１／３）…… 33
第17図　唐津実測図（１／３）…… 34
第18図　陶器実測図（１／３）…… 35
第19図　陶器実測図（１／３）…… 36
第20図　擂鉢実測図（１／３）…… 37
第21図　擂鉢実測図（１／３）…… 38
第22図　焙烙実測図（１／３）…… 39
第23図　かわらけ・瓦質土器実測図（１／３）…… 40
第24図　弥生土器実測図（１／３）…… 41
第25図　弥生土器実測図（１／３）…… 42
第26図　須恵器・土師質土器実測図（１／３）…… 43
第27図　軒平瓦・軒桟瓦実測図（１／４）…… 44
第28図　丸瓦実測図（１／４）…… 45
第29図　丸瓦・平瓦・桟瓦実測図（１／４）…… 46
第30図　木簡実測図（１／２）…… 47
第31図　木製品実測図（１／３）…… 48
第32図　木製品・漆器実測図（１／３）…… 49
第33図　土錘・金属製品実測図（１／３）…… 50

1　調査の契機

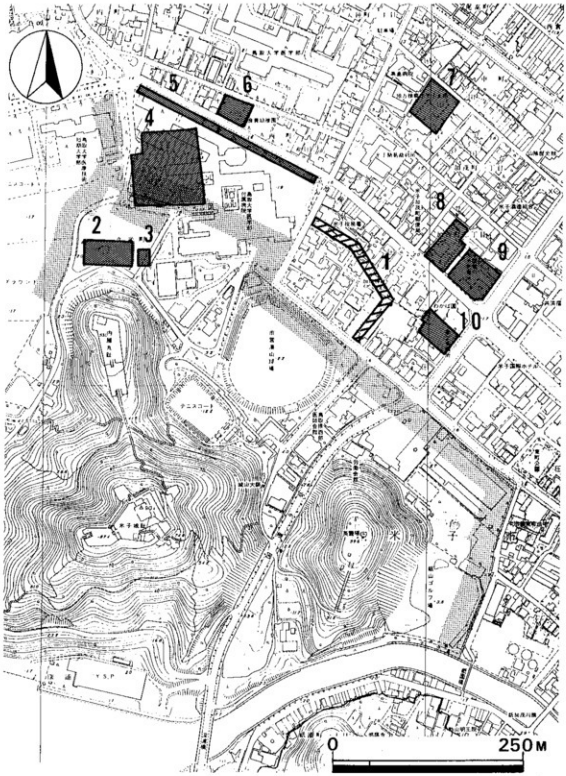
米子城跡７遺跡は、米子市が実施する米子駅境線加茂町沿道土地区画整理事業区画道路新設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査である。調査地は、米子市加茂町、久米町、西町に所在し、当地は、米子城跡外郭内に位置し、絵図等によって武家屋敷の存在が考えられ、さらに近接する場所（米子城跡１～３遺跡、久米第１遺跡）での発掘調査において江戸時代及びそれ以前の遺物、遺構を確認している。このような結果をふまえ、米子市教育委員会による試掘調査を経て、米子市教育委員会と米子市公園街路課との協議の結果、本調査の実施を決定し、米子市公園街路課から発掘調査の委託を受け、財団法人米子市教育文化事業団が調査を行った。調査は、１～３区を平成６年８月18日から12月７日まで、４区を平成７年６月５日から25日までの期間で行った。調査面積は、１区が320㎡、２区が320㎡、３区が360㎡、４区が245㎡、合計1,245㎡である。

2　位置と環境

米子城跡は、ＪＲ米子駅の北西にひろがる北東－南西1.0㎞、北西－南東1.2㎞の城跡及び城下町で、標高90ｍの湊山（城山）を中心にその山麓の北側と東側に内堀をめぐらせ、その外側には北郊を流れる加茂川の一部を利用した外堀をめぐらせている。

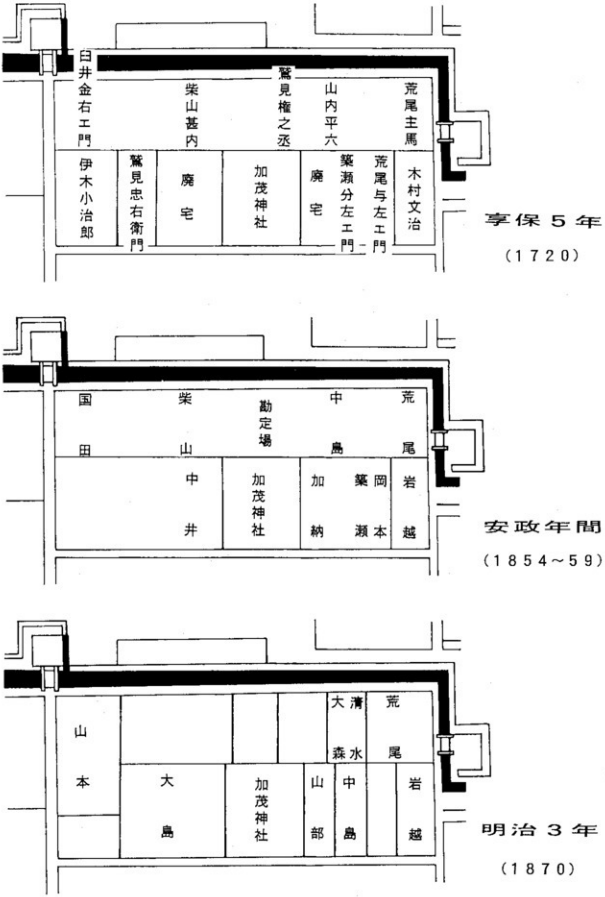
今回の調査地は、湊山の北東麓の内堀に近接した位置にあり、この地域は、かつては内堀に面した側は堀端町と呼ばれ、その北西側は宮ノ町と呼ばれていた。堀端町は、東西約350間に及ぶ武家地で、城の正門にも近く追手の最も重要な地域とされ容易に他藩領人の出入りが許されなかった。また、当町に屋敷をもつ武家の多くは米子組士で、鳥取藩の西部の藩政の要職に任じられた。「米子御城下夫々間数」では、東側が堀端片原侍町、西側が堀端町となっている。宮ノ町はほぼ東西に通る道筋に沿う長さ125間の武家地で、地名は、地内に加茂神社、八幡宮が鎮座することに由来する。「伯耆国米子平図」（宝永６年　1709年）と「湊山金城米子新府」（享保５年　1720年）では三社町、「伯州米子之図」では宮域町、「米子御城下夫々間数」では御社町と記されている。

今回の調査地は、宝永６年（1709年）、享保５年（1720年）の絵図では、武家屋敷が確認でき、一部廃宅となっているが、鷲見権之丞、築瀬分左ェ門、荒尾与左ェ門、木村文治の名が見られる。しかし、安政年間になると勘定場、加納、築瀬、岡本、岩越となり、明治３年には山部、中島、岩越へと変わっており武家屋敷の変遷が見られる。（第２図）

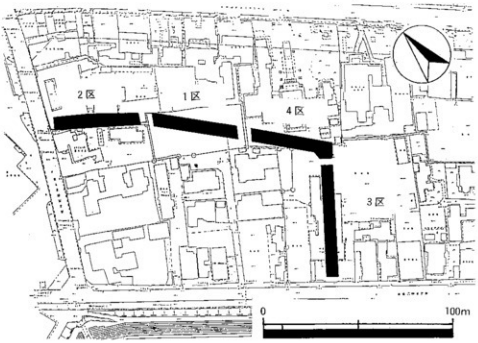


1　米子城跡７遺跡
2　久米第１遺跡
3　米子城跡５遺跡
4　米子城跡１遺跡
5　米子城跡６遺跡
6　米子城跡２遺跡
7　米子城跡４遺跡
8　米子城跡９遺跡
9　米子城跡３遺跡
10　米子城跡８遺跡

第１図　調査地及び周辺遺跡分布図

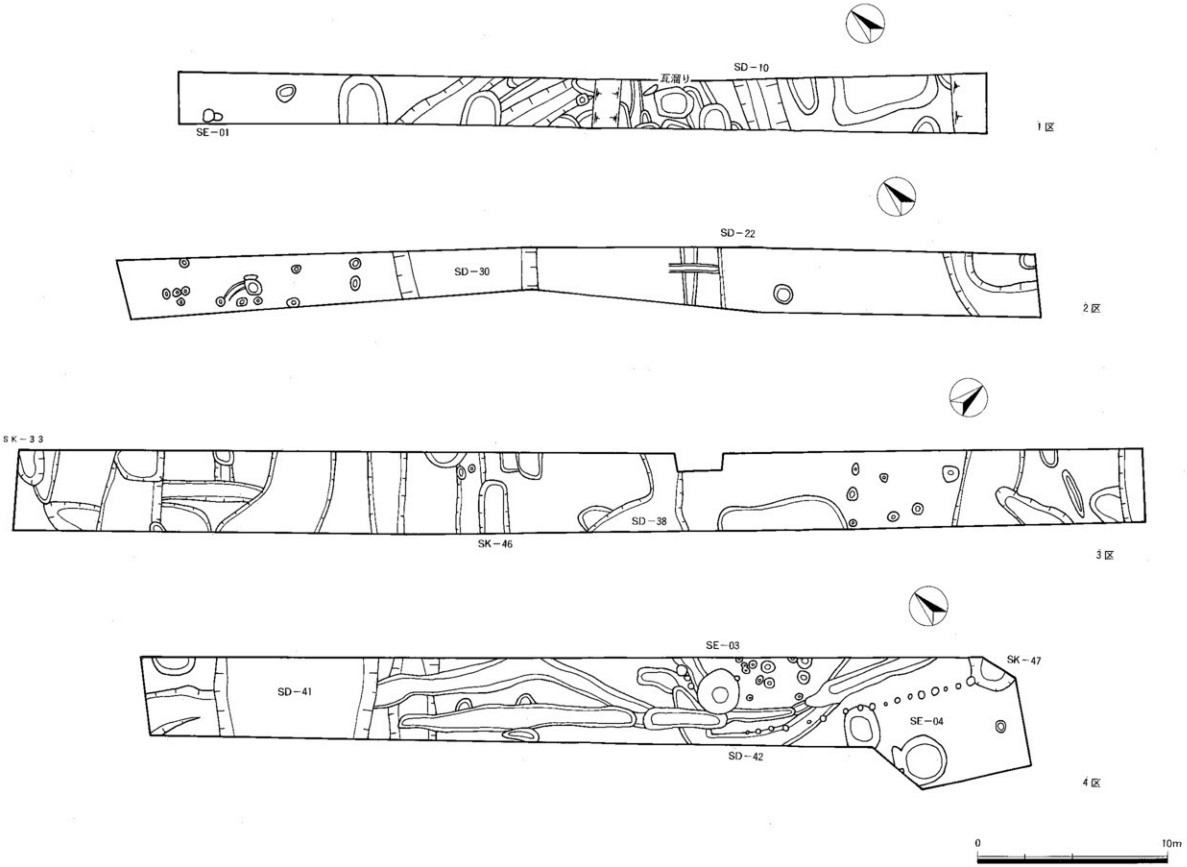


第２図　屋敷の変遷模式図



第3図　調査区配置図

第4図　地籍図と屋敷境界


SD－10
瓦溜り
SE－01
1区
SD－22
SD－30
2区
SK－33
SD－38
SK－46
3区
SE－03
SK－47
SD－41
SE－04
SD－42
4区
0
10m

第5図　遺構配置図

3　調査の概要

調査は幅６ｍの道路部分を４つの調査区に分けて行った。調査区の名称は調査を行った順番により、１区は加茂神社の北西の調査区、２区は１区の北西の調査区、３区は加茂神社の南西の調査区、４区は加茂神社境内部分で、平成６年度には１、２、３区、平成７年度には４区の調査を行った。調査の結果、弥生時代から近現代までの遺物が出土し、弥生時代中期の包含層、貝塚、江戸時代前期の建物の廃棄跡、江戸時代後期の庭園状遺構、溝、土坑、井戸、近代の建物跡、塀等を検出した。

4　検出遺構

1　区

１区は加茂神社の北西に位置する長さ53.5m、幅６ｍの調査区で、宝永６年と享保５年の絵図では築瀬分左エ門の屋敷と庵宅、安政年間の絵図では加納の屋敷となっている。

基本層序は現地表面から近現代の盛土（第１層）、明治以降の水田耕作土（第２層）、江戸時代後期の堆積土（第３層）、灰白色粗砂（第４層）で、第１層は厚さ0.8～1.0m、標高0.8～1.8m、第２層は上層より灰茶色粘土層（第２－１層）、暗灰色砂質土層（第２－２層）の２層から成り、厚さ0.2～0.4m、標高0.4～0.8m、第３層は黒灰色砂質土層で、厚さ0.1m、標高0.5～0.7m、第４層はその上面の標高は0.4～0.7mで、３区の土層堆積状況から第３層が江戸時代後期の遺構面となっているが、１区では明治以降の耕作によって削平され、ほとんど残存していないために第４層上面で遺構検出を行った。

検出した遺構は溝６条、土坑21基、井戸１基、瓦溜り１基、ピット３基で、これらは江戸時代後期～幕末、明治のものである。

ＳＤ－１０

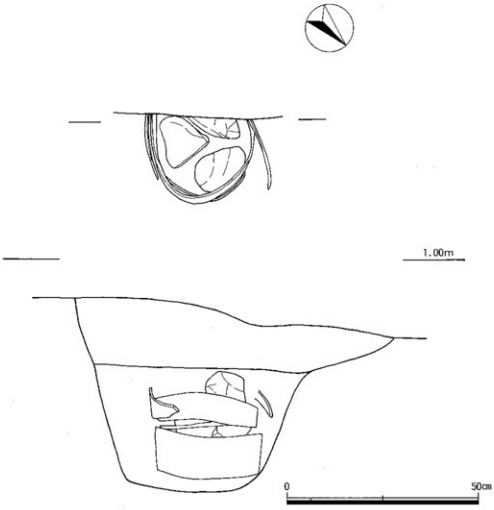
ＳＤ－10は幅2.1m、深さ0.4mの溝で、一度埋まった後再び幅1.1m、深さ0.3mの溝が掘削されている。古い溝の埋土は上層より灰褐色砂質粘土、灰褐色粘土で、新しい溝の埋土は上層より灰褐色粘土、灰褐色粘土と灰色砂の混合層である。明治24年の旧図ではＳＤ－10は水田と水田との境界に位置していることから明治の水田と水田の境界を示す溝であると思われる。また、明治24年の旧図の畦畔の方向及び形態と宝永６年と享保５年の絵図による武家屋敷地の地割りとの比較、照合からこの溝は江戸時代の武家屋敷（築瀬分左エ門の屋敷と庵宅）の境界を踏襲した可能性がある。

ＳＥ－０１（第６図）

ＳＥ－01は上部がかなり削平され、排水溝によって平面形態を確認できないが、断面観察では直径0.8m、深さ0.5mの掘方の中に直径0.3m、高さ７～12cmの曲物を３つ重ねて井戸枠として用いている。井戸枠内の底には15cm大の石が３つ置かれている。

瓦溜り

瓦溜りは長辺2.3m、短辺1.8m、深さ0.5mで、埋土は淡茶灰色砂質土と粘土の混合層（上層）と淡灰茶色粘土層（下層）の２層から成り、淡茶灰色砂質土と粘土の混合層から瓦、陶磁器がまとまって出土した。陶磁器は江戸時代後期～明治のもので、明治になって江戸時代の武家屋敷が解体、廃棄または修理されたものと思われる。



第６図　SE－01実測図

小　　結

1区は宝永6年と享保5年の絵図によると築瀬分左エ門と廃宅の2件の屋敷地となっているが、今回の調査では武家屋敷の裏庭部分にあたるためなのか建物は確認できなかったが、築瀬分左エ門の屋敷内の井戸と築瀬分左エ門の屋敷と廃宅との境界を踏襲したと思われる溝を検出した。また、家屋の瓦や陶磁器を廃棄した瓦溜りから江戸時代から明治における社会の転換期にこれに符合するように屋敷の変遷がうかがえる。また、この瓦溜りは屋敷の隅に位置するものと思われ、屋敷の境界及び屋敷地内の利用の一端がうかがえる。

2　　区

2区は1区の北西に位置する長さ58.5m、幅5.5mの調査区で、宝永6年と享保5年の絵図では木村文治と荒尾与左エ門の屋敷となっている。

基本層序は調査区の北西部と中央部と南東部で近世以前の地形や明治以降の土地利用が異なるために若干異なるが、基本的には現地表面から近現代の盛土（第1層）、明治以降の水田耕作土（第2層）、近世の水田耕作土（第3層）、近世に弥生時代中期の貝層を削平し堆積した層（第4層）弥生時代中期の貝層（第5層）、弥生時代中期の包含層（第6層）、灰白色粗砂（第7層）となっている。第1層は厚さ0.9～1.3m、標高0.2～1.8m、第2層は上層より灰色粘土と灰色砂の混合層（第2－1層）、暗灰色粘土層（第2－2層）、灰白色粘土と淡灰色砂の混合層（第2－3層）、灰褐色粘砂層（第2－4層）の4層から成り、厚さ0.1～0.4m、標高0.4～0.9m、第3層は淡茶色粘質土層で、厚さ0.1～0.6m、標高0.2～0.5m、第4層は暗茶色粘土層で第5層の貝層を削平した貝が混じっている。厚さ0.1～0.3m、標高－0.3～0.1m、第5層は厚さ0.3m、標高0.1～0.4m、第6層は上層より茶灰色砂層（第6－1層）と灰色粗砂層（第6－2層）の2層から成り、厚さ0.3～0.4m、標高－0.4～0.3m、第7層はその上面の標高は－0.4～－0.2mである。調査区の南東側は第1→第2→第7層となっており、中央部は第1→第2→第3→第4→第5→第6→第7層となっており、北西側は第1→第3→第4→第6→第7層となっており、第1層と第3層との間には厚さ0.2～0.4mの昭和初期の整地層と厚さ0.1～0.2mの旧表土、厚さ0.1～0.2mの近世～近代の整地層がある。

検出した遺構は昭和初期の整地層上面で建物跡1棟（SB－01）、塀1条（SA－01）、土坑2基、ピット4基、近世～近代の整地層上面でピット11基、第3層上面で溝6条、土坑1基、ピット6基、第5層で溝1条を検出した。調査区の南東側では明治以降の水田耕作によって削平されているために第7層上面で溝1条、土坑1基を検出した。また、調査区の南東側では第2層下で17世紀中頃に家屋を解体し、廃棄した跡を検出した。

貝　　塚

貝塚は弥生時代中期の微高地の北西側縁辺部に広がり、後世にかなり削平をうけているが、現状では南東－北西幅14.2m、厚さ0.3mの規模で、断面では幅0.3～1.4m、厚さ5～20cmの貝の廃棄ブロックが確認できる。貝塚の北西側にも南東－北西幅10.4m程のまだらな貝の分布が見られ、断面でも厚さ10cm程の水平堆積が確認できるが、貝の堆積の方向に規則性が認めら

れず、しかも近世の遺物が出土することからこれは貝塚の一部が崩壊し、流れ込んだものではなく、近世に削平され堆積したものと思われる。

ＳＤ－２２

ＳＤ－22は南東側をコンクリート擁壁によって破壊されているが深さ0.1mをはかる。この溝は明治24年の旧図の畑と水田の境界と一致する位置にあり、明治24年の旧図の畦畔の方向及び形態と宝永６年と享保５年の絵図による武家屋敷地の地割りとの比較、照合からこの溝は木村文治と荒尾与左エ門の屋敷の境界である可能性がある。

ＳＤ－３０

ＳＤ－30は幅7.9m、深さ0.9mの溝で、埋土は上層より淡灰茶色粘土、灰色粘質シルトとなっている。両層とも人工遺物は皆無であるが、淡灰茶色粘土層からはシカの下顎骨が出土している。

建物廃棄跡

調査区の南東側の幅2.1m、深さ0.3mのくぼみに瓦、陶磁器、コワ、板材、箸、漆塗椀等が廃棄されていた。これは宝永６年と享保５年の絵図に見られる屋敷が築かれる以前に存在した屋敷が解体、廃棄されたものであると思われる。廃棄された時期は17世紀中頃で、この建物の存続時期は17世紀前半～中頃である。

ＳＢ－０１

ＳＢ－01は昭和初期の整地層の上につくられ、長さ10.1m、幅2.3mで、北西側に長さ1.3mの張り出しがあり、さらにその先にピットがあり、建物の北西側に庇がつくものと思われる。また、建物の南西側面には屋敷の南東側を区画する塀（ＳＡ－01）がとりつく。ＳＢ－01は幅0.6～0.8m、深さ0.3mの溝の中に根固めの石を詰め込み、さらにその上に現状の長さ1.1m、幅0.2m、厚さ0.2mの細長い石を置いて建物の土台としている。

ＳＡ－０１

ＳＡ－01はＳＢ－01に伴うものと思われ、屋敷の南東側を区画するもので、北東－南西方向から直角に折れて北西にのびＳＢ－01の南西側面にとりつくが、北西方向部分の上にはコンクリート擁壁が築かれている。ＳＡ－01は沈下を防ぐために下に幅0.1m，厚さ0.1mの角材を置き、その上に石を積み上げて築いている。また、塀の外には土留めのための幅0.1m，厚さ0.1mの角材が置かれている。角材は焼失した柱を用いている。塀は幅0.5mで、現状で石を３段（高さ0.2m）積み上げており、屋敷の中から外に排水するための暗渠と長辺0.4m、短辺0.2m、高さ0.1mの方形の段がある。暗渠は長さ0.5m、幅0.2m、厚さ0.1mの石に幅0.1m、深さ６㎝の溝を彫り込んだものを設置し、屋敷の中の幅0.4m、深さ0.1mの溝に接続させている。この溝の西側の縁は石で護岸されている。

小　結

２区は宝永６年と享保５年の絵図では荒尾与左エ門と木村文治の２件の屋敷地となっており、安政年間には木村文治の屋敷は岩越の屋敷へと変わっている。今回検出したピットは出土遺物

から考えて岩越の屋敷の建物に伴うものであると思われるが調査区が狭いため建物として認識するまでには至らなかった。しかし、ピットを検出した場所が屋敷地の中央部よりやや後ろにあたるものと思われ、屋敷地のほぼ中央部に建物が存在したことが推測される。

また、17世紀中頃の建物の廃棄跡出土の陶磁器は17世紀前半～中頃の一括遺物として扱うことができ、しかも層位的に分けることができ陶磁器の編年、様式を考えるうえでは大変貴重な資料である。

弥生時代中期には微高地の縁辺部に貝塚が形成され、微高地上に集落が営まれていたことが推測される。また、久米第１遺跡からも前期、中期を中心とする遺物が出土していることから地形的には異なるが何らかの関連が考えられる。

３　区

３区は加茂神社の南西に位置する長さ71m、幅５ｍの調査区で、宝永６年と享保５年の絵図では鷲見権之丞の屋敷、安政年間の絵図では勘定場となっている。

基本層序は現地表面から近現代の盛土（第１層）、明治以降の耕作土（第２層）、江戸時代後期の堆積土（第３層）、灰白色粗砂（第４層）となっている。第１層は厚さ0.6～0.9m、標高0.7～1.6m、第２層は上層より暗灰色粘土層（第２－１層）と暗灰褐色粘質土層（第２－２層）の２層から成り、厚さ0.1～0.3m、標高0.6～0.9m、第３層は黒灰色砂質土層で、１区の第３層と対応する。厚さ0.1～0.2m、標高0.2～0.7mである。第４層はその上面の標高は0.2～0.7mである。遺構は第３層上面で検出した。

検出した遺構は溝10条、土坑14基、ピット９基である。

ＳＤ－３８（第７図）

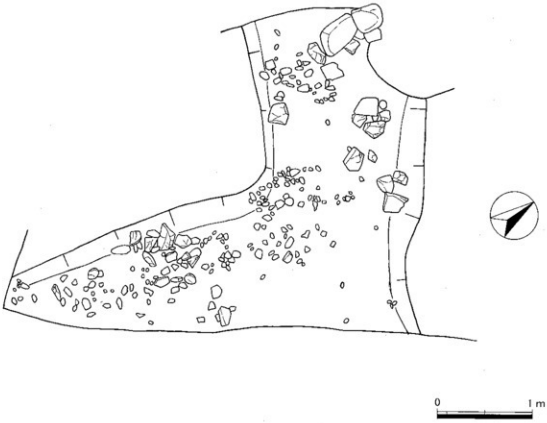
ＳＤ－38は幅1.7m、深さ0.1mの平面Ｌ字またはＴ字状の溝で、溝の底には３～５㎝大の玉石が敷かれ、溝内には溝の縁に並べられていたものと思われる10～20㎝大の石が落ち込んでおり、３石だけがほぼ現状を保っている。また、溝の北端では上面が平坦な30～40㎝大の石が２つ並んでおり、これらは飛び石状のものであると思われる。この溝は以上のことから庭園施設に関わる溝であると思われる。

ＳＫ－４６（第８図）

ＳＫ－46は現状の長さ2.5m、幅1.5m、深さ0.2mの土坑で、埋土は上層より淡灰茶色土、灰茶褐色粘質土で、上層には石、陶磁器、瓦、コワ、木片を包含し、下層には石を包含している。石の並び方には規則性は認められず、陶磁器、瓦、コワ、木片が投棄されている状態であり、しかも石が焼けていることから焼失した家の廃材をここに廃棄したものと思われる。また、土坑の底には径15㎝のピットが西端には４つ、東端には３つ並んでおり、杭状のものを打ち込み、何らかの施設を築いていたものと思われる。

ＳＫ－３３

ＳＫ－33は長径2.0m以上、短径1.6m、深さ0.6mで、埋土は上層より暗灰色砂質土と褐色粘砂の混合層、灰色砂質シルト、濃茶色粘土で、濃茶色粘土層から木簡、木製品が出土した。

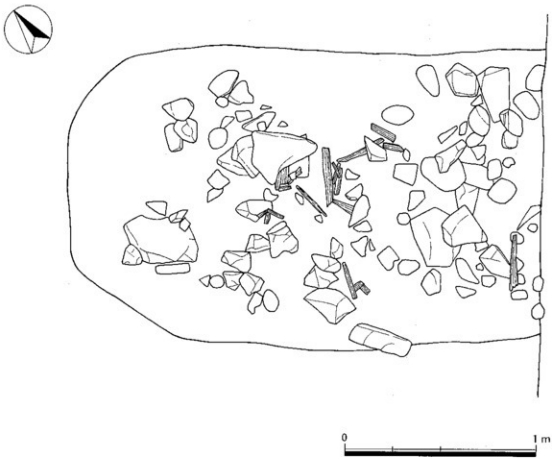


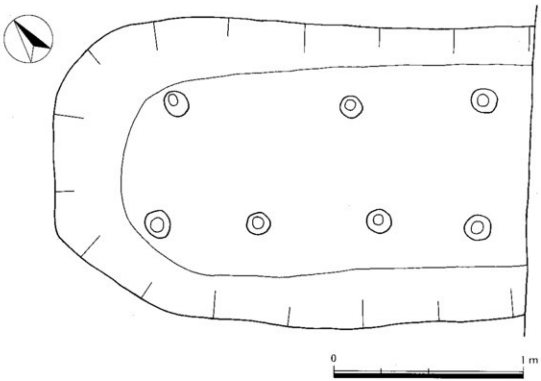
第７図　SD－38実測図

小　結

３区は宝永６年と享保５年の絵図では鷲見権之丞の屋敷地となっており、安政年間には勘定場へと変わっている。今回検出した遺構は出土遺物から考えて勘定場に関わるものと思われる。建物については確認できなかったが、庭園施設の一部と思われる溝があり、勘定場という財政を扱う公的な施設にこのような庭園があったのかは疑問が残るが、勘定場には漢学を中心に教える教育施設も併置されていたのでその関係も考えられる。

ＳＫ－33から出土した木簡は米子城跡では初めての出土例で城下町内の流通を考えるうえで貴重な資料である。また、勘定場という公的な施設で、しかも内堀のそばから出土したということは内堀を介して勘定場に貢納品が納められていたものと思われる。





第 8 図　SK－46遺物出土状況図・実測図

4　区

4区は加茂神社境内に位置する長さ44mの調査区で、宝永6年と享保5年、安政年間の絵図では加茂神社境内となっている。

基本層序は現地表面から現表土（第1層）、盛土（第2層）、旧表土（第3層）、旧表土（第4層）、旧表土（第5層）、灰白色粗砂（第6層）となっている。第2層は明褐色土層、第3層は明褐灰色土層で、明治中頃以降の旧表土、第4、5層は明治前半以前の旧表土である。

検出した遺構は溝6条、土坑7基、井戸2基、ピット13基、杭列1条である。

ＳＤ－４１

ＳＤ－41は幅8.6m、深さ0.3mで、明治24年の旧図の加茂神社の北西の境界に位置する。この溝は単なる境界ではなく、これほどの幅をもっていることから内堀につづく水路として利用されていたものと思われる。

ＳＤ－４２

ＳＤ－42は幅1.1m、深さ0.2mで、明治24年の旧図の加茂神社の南東の境界に位置する。

ＳＥ－０３（第9図）

ＳＥ－03は直径2.1mの堀方の中に直径0.9m，深さ1.0mの井戸枠がある。井戸枠は直径0.9m、長さ0.7mの桶を2つ逆にして重ねているが、上の桶はほとんど残存していない。この井戸の底には五輪塔の空輪、風輪があり、さらに、その下には犬の骨がある。このように井戸内から五輪塔が出土する例は米子城跡で数例見られ、さらに、今回の調査では五輪塔の下から犬の骨が出てきたことからこれらは井戸祭祀に関わる可能性があり、江戸時代前半にはこのような祭祀が比較的盛んに行われていたものと思われる。

ＳＥ－０４（第10図）

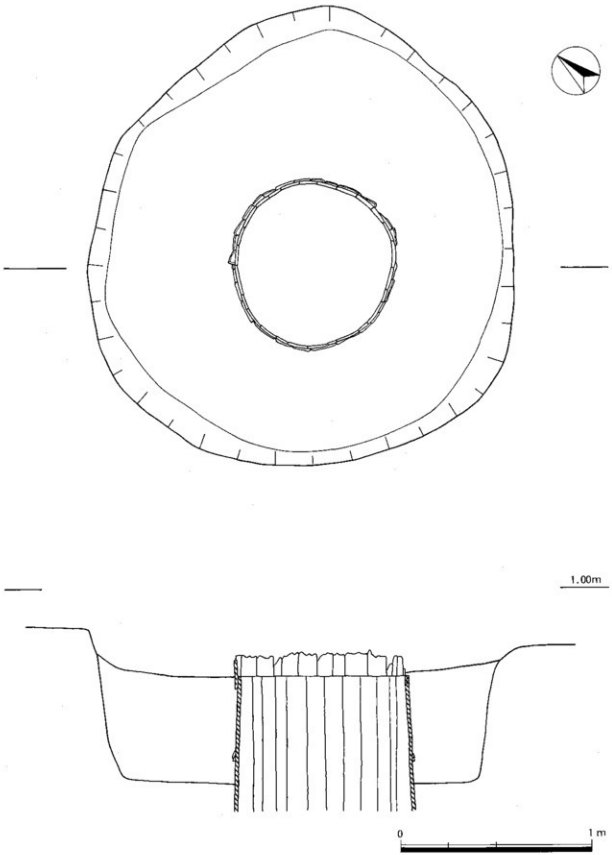
ＳＥ－04は直径2.6mの堀方の中に直径1.2m，深さ0.6mの井戸枠がある。井戸枠は底に横長の大きめの石を垂直に2段積み上げた上にやや外に開くように石を積み上げている。時期は幕末から明治にかけてのものである。

ＳＫ－４７（第11図）

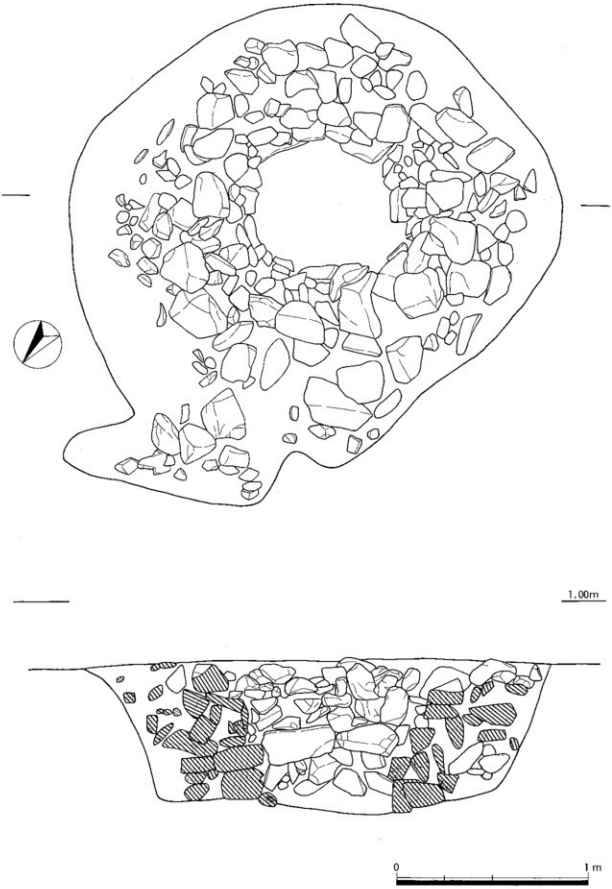
ＳＫ－47は直径2.5mの堀方の中に直径1.0m，深さ0.3mの円形の石組がある。石組は1段積みで、上面が比較的平坦で40～60㎝大の3つの大きな石を円形に並べ、その北東側には10～20㎝大の石を西側に5つ、東側に4つ並べて幅10㎝の溝をつくっている。この溝は周囲から土坑内に水を引き入れたものであると思われる。この土坑はこのような周囲から水を引き入れる溝をもつことから水汲み、洗い場的なのものであると思われる。土坑からは土師器坏、土錘、下駄、桶の底板、曲物が出土した。時期は12～13世紀である。

杭　列

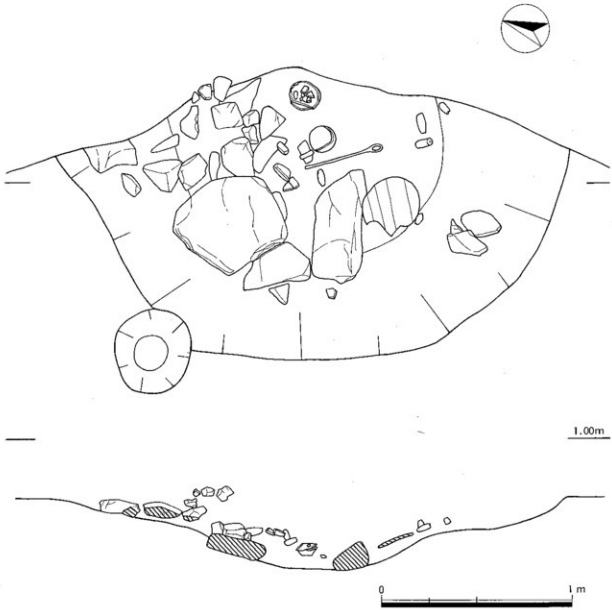
4区の南東隅には杭列がある。杭の直径は0.2～0.4m、杭間は0.7m間隔である。これらは現在、神社の境界にある水路と重なっていることからごく最近の水路構築以前の神社の境界にあたるものと思われる。



第9図　SE－03実測図



第10図　SE－04実測図



第11図　SK－47実測図

小　結

4区は加茂神社の境内である。加茂神社は創建年代は不詳であるが、慶長3年（1598年）の棟札があり、16世紀末まではさかのぼることができる。今回の調査では神社の創建に関わるものを期待したが、検出した遺構、遺物は幕末から明治にかけてのものが中心である。

3区では2基の井戸と1基の洗い場状の遺構（SK－47）を検出した。各々時期差があり、ほぼ同じ位置にあることから元来地下水位が高く、水量が豊富で、水脈が安定していたものと思われる。現在でも神社境内には米子三名水の井戸がある。

5　出土遺物

1　磁　器（第12～16図）

伊万里（第12～16図　1～96）伊万里は17世紀中頃の初期伊万里から明治、大正までのものが見られる。初期伊万里は2区の建物廃棄跡から一括して出土した他はほとんど見られず、時期的には18世紀～幕末のものが主流である。器種別にみると碗が圧倒的に多く（45.7%）、皿（16.3%）、小坏（14.2%）がこれに次ぎ、伊万里全体では食膳具が9割を占めている。

碗（第12、13図　1～36）1～16は17世紀中頃～後半、19、20は18世紀前半、21～34は18世紀後半～幕末のものである。1は古九谷様式のもので外面に椿の色絵を施し、釉薬は厚く、高台には砂が付着している。2は外面に丸文を描く。3は中国磁器を模倣したもので外面の三方に丸文を配し、その中に雨龍を描く。高台内には「大明成化年製」の銘がある。4は外面の三方に丸文を配し、その中に竹、笹、水を描き、丸文間には松葉を描く。見込みには鳥を描き、高台内には「大明」の銘がある。5は4と同じモチーフを描く。6は高台を施釉後削り取っている。内外面には貫入が見られる。7は白磁で口縁に口紅装飾を施している。高台には砂が付着している。8は内外面に貫入が見られ、高台には砂が付着している。9は口縁端部が外反し、外面には一重網目文を描く。内外面には貫入が見られる。10は外面の区画間に一重網目文を描き、高台内無釉である。12は外面に青海波文を描く。13は外面に鳥（？）を描く。14は外面に草花文を描く。16は外面に龍（？）を描く。15、17は内外面に貫入が見られる。18は高台に砂が付着している。19は外面にコンニャク判を用いる。20は外面に手描きの枝にコンニャク判による花を描く。21は外面の三方に丸文を配し、見込みには蛇ノ目釉剥ぎが行われ、見込み中央部にはコンニャク判による五弁花文がある。22は外面に草を描き、見込み中央部にはコンニャク判による五弁花文がある。高台内に「大明年製」の銘がある。23は外面に牡丹、内面に雷文を描く。24は外面に松葉、内面に四方襷文を描く。25は外面に格子目文と木葉文、内面に格子目文を描く。26は外面に菊花散らし文を描く。27は外面に菊花と蝶を描く。28は端反碗で、外面に二重の格子目文、内面に雷文を描く。29も端反碗で、内外面に梅樹を描く。焼継が行われている。31～34は広東碗である。32は外面に草木を描く。33は外面に扇を描き、見込みには「寿」の銘がある。34は外面に木、岩、水、山の風景を描き、見込みには「寿」の銘がある。35、36は陶胎染付である。35は外面に木と遠山を描く。17世紀中頃のものである。36は外面に四方襷文と木を描き、口縁には口紅装飾を行っている。17世紀後半のものである。

皿（第14図　37～51）37～45は17世紀中頃、46～49は18世紀前半、50、51は18世紀後半～幕末のものである。37は薄手で外面に唐草を描く。38は白磁で高台に砂が付着している。39は内外面に貫入が見られ、高台には砂が付着する。40は見込みに梅花を描く。41は見込みに4つの砂目があり、内面に鉄絵が施されている。42、43は見込みに牡丹を描き、高台には砂が付着する。42は内面に蓮弁を浮彫りする。44は内面に果樹を描き、高台には砂が付着する。45は大皿で内外面に貫入が見られる。46は外面に連続唐草文、内面に松竹梅を描き、見込みにはコンニャ

ク判による五弁花文がある。高台内には「大明年製」の銘がある。47は見込みにコンニャク判による五弁花文がある。48、49は粗製の小皿で見込み蛇の目釉剥ぎである。50は底部から屈曲して立上がり、見込みには草花、遠山を描く。51は内面に蛸唐草文を描き、見込みは完存していないが、松竹梅を環状に配していたものと思われる。高台は蛇ノ目凹形高台である。

湯飲み碗（第15図　52～55）52、53は丸形の湯飲み碗、54、55は筒形の湯飲み碗である。52は外面に遠山を描く。53は外面に草を描く。両者とも19世紀前半のものである。54は内外面に輪宝文を描く。55は外面に蛸唐草文、内面に四方襷文を描く。

小坏（第15図　56～65）56～64は17世紀のものである。56～59は外面に蘭を描き、56、58、59は高台内無釉である。60はヘラ彫りによる竪筋文があり、高台内無釉である。61は白磁で高台に砂が付着している。63は外面に梅花を描き、底部はシボリ成形を行う。蛇ノ目高台で高台内無釉である。64は外面に鳳凰を描く。65は56～64とは異なり口縁が内湾する。

そば猪口（第15図　66～68）66は白磁である。67は高台に砂が付着している。68は外面に雨降文を描き、高台には砂が付着している。

蓋（第15図　69～75）69、70は口縁が内湾し、かえりがつく。頂部には棒状のつまみがつく。69は外面に丸文、70は外面に草を描く。71は口縁が内湾するが、かえりはつかない。外面に細線で龍、内面に四方襷文を描く。72～75は口縁が内傾し、かえりはつかない。頂部には環状のつまみをもつ。72は外面に花を描く。73は外面に「寿」字、内面に雲気文を描く。74は外面に鳥、雲、見込みに雲を描く。75は外面に細線による花、内面に雷文を描く。

鉢（第16図　76～80）76～78は口縁が輪花型の鉢で、79、80は大鉢である。76は薄手で内面に唐草、外面に雲を描く。77は内面に墨弾によって区画と紋様を表現している。78は外面に連続唐草文、内面に蛸唐草文を描く。79は口縁が直角に折れ、外面に木、口縁に花を描く。17世紀後半のものである。80は鍔縁口縁で口縁内面には列点を描く。内外面に貫入が見られる。17世紀中頃のものである。

紅皿（第16図　81～86）81は型押し成形によって貝の紋様を型どる。82は外面に雨降文を描く。83～86は外面に笹を描き、83は高台外面無釉である。

瓶（第16図　87～90）87は口縁が直立し、外面に蛸唐草文を描く。88は口縁端部が外反する。90は高台に砂が付着する。

段重（第16図　91）外面に枝葉を描き、口縁内面は無釉である。

水滴（第16図　92、93）92は型押し成形によって菊花と葉を形づくり、葉を緑色に着色する。93は型押し成形によってつくられ、注口部は菊花を浮彫りにし、着色している。壷に生けた菊花を表現している。

仏飯器（第16図　94、95）94は全面施釉である。95は外面に雨降文を描き、底部無釉である。

その他（第16図　96）96は型押し成形によってつくられた獅子である。鉄釉で着色している。

2　陶　　器（第17～19図）

陶器は産地不明のものが多いが、唐津、志野、清水系、在地の石見系、布志名がある。時期的には17世紀代と幕末に偏り、17世紀代は唐津が大部分を占めるが18世紀には姿を消し、幕末になると在地産のものが多くなる。器種は唐津では碗、皿が多いが、幕末になるとバラエティーに富んでくる。

唐津（第17図　1～23）

皿（第17図　1～12）1は胎土目をもち、暗緑色の釉がかかる。胎土は少し鉄分を含んだ淡黄灰色である。2は見込みに砂目をもち、灰釉がかかる。胎土は淡灰色である。3は見込みに砂目をもち、灰釉がかかる。胎土は灰白色である。4は見込みに蛇の目釉剥ぎが行われ、長石釉がかかる。胎土は鉄分を含んだ淡赤褐色である。5は見込みに砂目をもち、長石の入った釉がかかる。胎土は明褐色である。6は見込みに3つの砂目をもち、高台にも3か所砂が付着する。暗灰色の釉がかかり、胎土は淡灰色である。高台は三日月状を呈する。7は見込みに3つの砂目をもち、高台にも3か所砂が付着する。灰釉がかかり、胎土は灰白色である。高台は三日月状を呈する。8は見込みに砂目をもち、長石の入った釉がかかる。胎土は明褐色である。9は見込みに各々3つの胎土目と砂目をもつ。内面と外面口縁部に灰釉がかかる。胎土は鉄分を含む。11は見込みに砂目をもち、口縁端部には溝がある。白濁した釉がかかり、胎土は淡黄灰色である。12は器壁が薄く見込みに3つの砂目をもつ。内面と外面上半部に乳褐色の釉がかかる。胎土は明褐色で、高台は三日月状を呈する。

碗（第17図　13～20）13は灰釉がかかり、高台脇を削り出している。高台は三日月状を呈し、胎土は明褐色である。14は内面に暗緑色の灰釉、外面全体に白濁した釉がかかり、底部ではかいらぎ状になっている。胎土は鉄分を含む。15は灰釉がかかり、高台畳付の幅が広く、高台脇を削り出している。胎土は明褐色である。16は絵唐津で高台は三日月状を呈している。胎土は灰色である。17は見込みに3つの砂目をもち、高台にも3か所砂が付着する。内面と外面全体に灰釉がかかる。胎土は灰白色である。高台は三日月状を呈する。18は黒唐津で胎土は灰白色である。19は高台畳付の幅が広く、淡茶緑色の釉がかかる。胎土は灰白色である。20は刷毛目の碗で、高台は断面三角形で施釉後端部を削りとる。

鉢（第17図　21、22）21、22は刷毛目の鉢で、20は内外面に、21は外面に刷毛目がある。

甕（第17図　23）23は口縁が逆L字を呈し、外面は二彩手、口縁内面は刷毛目である。

志野（第18図　24）24は向付であると思われる。鉄絵ではなく呉須で紋様を描き、底部無釉である

清水系（第18図　25）25は碗で外面に鉄顔料で樹木を描く。

在地及び産地不明の陶器（第18、19図　26～58）

碗（第18図　26～33）26は口縁端部が平坦で、口縁内面と端部は無釉である。乳白色の釉がかかり貫入が見られる。28、30は布志名である。29は青磁釉がかかる。31は小型で、ぐい呑であると考えられる。高台内無釉である。33は見込みに胎土目をもつ。高台畳付の幅が広く、高台端部外側を面取りしている。

皿（第18図　34～37）34～36は在地系の灯明皿で、いずれも内面に鉄釉がかかる。34は口縁が内湾し見込みには環状の砂目がある。底部は回転糸切りである。35、36は受部をもち、35は口縁が内傾し、36は口縁が直立する。37は石見系の変形皿で内面に鉄顔料で枝を描き、化粧土のイッチンによって梅花を表現している。

盃（第18図　38、39）38は内面と外面口縁部に釉がかかる。39は底部外面以外は釉がかかり、高台は三日月状を呈する。

鉢（第18図　40～44）40、41は底部で、見込み蛇の目釉剥ぎである。42は口縁が内湾し、43は口縁端部が外反する。44は口縁が大きく内湾した後外反する。

蓋（第19図　45～47）45～47は布志名の蓋でいずれも内面無釉である。46、47は底部が回転糸切りである。45は両側を欠損しているが47のような形態になるものと思われ、中央には両側から押しつぶしたつまみがつく。46は45、47のような蓋につくつまみで、疑宝珠形を呈する。

壺（第19図　48）48は布志名の無頸壺で内面無釉である。

茶入（第19図　49）49は産地は不明であるが器壁が薄く、外面と内面口縁部に鉄釉がかかる。胎土は灰白色である。

土瓶（第19図　50～54）51は素焼きで器壁が薄く、ロクロを用いず手づくねで成形している。52は二彩手風である。53、54は布志名である。

火入れ（第19図　55、56）55、56は布志名で、口縁を内側に折り曲げる。内面無釉である。

片口（第19図　57、58）57は在地産のもので見込みに４つの胎土目がある。高台内部には叩き板状工具痕がある。58は石見で見込みの釉をぬぐいとっている。

3　擂　鉢（第20、21図）

擂鉢には備前と産地不明のものがある。また、備前以外の産地不明のものは口縁の形態によって３つに分類できる。

備前（第20図　１、２）１、２は口縁が幅広い帯状になって張り出し、口縁外面に１は１条、２は２条の条線を施す。１６世紀末のものである。

A類（第20図　３～８）Ａ類は口縁端部を外側に折り曲げ、肥厚するものである。８は高台をもち、体部内面に２３本１単位の条線を施した後に底部内面に１７本１単位の条線を放射状に施している。

B類（第21図　９～11）Ｂ類は口縁端部を外側に折り曲げ、外上方へつまみだすものである。10は８本１単位の条線を施す。

C類（第21図　12～16）Ｃ類は口縁端部を外側に折り曲げ、口縁外面直下を下方へつまみ出すものである。16は削出し高台をもち、外面を削っている。13、15は内面に条線を施した後に口縁内面端部付近をヨコナデ調整を行い、条線上部をナデ消している。12は口縁内面に沈線をもつ。14は内面に８本１単位の条線を施す。

4　焙　烙（第22図）

焙烙は口縁と底部の調整技法と口縁の形態によって２類４群に分類できる。

Ａ－１類（第22図　１、２）Ａ－１類は口縁と底部の境に回転を利用した粘土の切り取り痕が明瞭に残るもので難波氏編年のＤ類に相当する。口縁は直立気味に外傾し口縁端部は平坦である。

Ａ－２類（第22図　３、４）Ａ－２類は口縁と底部の境に回転を利用した粘土の切り取り痕があるがＡ－１類ほど明瞭ではないもので難波氏編年のＤ類に相当する。口縁は内湾し口縁端部は平坦よりもやや丸みを帯びる。

Ｂ－１類（第22図　５）Ｂ－１類は口縁と底部の境に回転を利用した粘土の切り取り痕がないもので難波氏編年のＥ類に相当する。口縁は内湾気味に外傾し口縁端部は丸くおさまる。

Ｂ－２類（第22図　６～９）Ｂ－２類は口縁と底部の境に回転を利用した粘土の切り取り痕がないもので難波氏編年のＥ類に相当する。口縁は内湾し口縁端部は丸くおさまる。

5　かわらけ（第23図）

かわらけとは素焼きの浅い皿形の土器で、おかずを入れたり、ご飯を盛ったり、灯明に使ったりと多岐にわたる用途に用いられている。土師器皿とも呼称するが、ここでは「かわらけ」と呼ぶことにする。また、これに関連するものとして受皿付灯明皿も取りあげたい。かわらけは調整技法、成形技法、口縁の形態によって８類に分類できる。Ａ～Ｅ類は層位的な差異がなく、多少の時期差も考えられるがほぼ同時期に併存したものと考えられ、共伴した陶磁器から１７世紀中頃～後半の時期が考えられる。Ｈ類は共伴した陶磁器から１７世紀後半～１８世紀前半に出現し幕末まで存続したものと考えられる。

Ａ類（第23図　１～３）Ａ類は底部を手づくね成形後ナデを行い、口縁端部が外反する。口縁内外面にはヨコナデを行い、底部内面にはナデを行う。底部内面の口縁と底部の境には強いヨコナデを行う。

Ｂ類（第23図　４～７）Ｂ類は底部を手づくね成形後ナデを行い、口縁外面と底部の境にはヘラ切りの際のヘラ状沈線が残る。Ｂ類は口縁の形態と口縁外面のヨコナデの範囲によって細分が可能であろう。口縁が外傾するもの（４、７）と外反するもの（５、６）とがあり、すべて口縁内面にはヨコナデ、底部内面にはナデを行うが、口縁外面は全面をヨコナデするもの（４、５）と上半部のみをヨコナデするもの（６、７）とがある。４は底部外面にはスノコ状圧痕があり、底部内面の口縁と底部の境には強いヨコナデを行う。

Ｃ類（第23図　８～10）Ｃ類は底部を手づくね成形後ナデを行い、口縁は大きく外反する。口縁内外面にはヨコナデを行い、底部内面にはナデを行う。９は底部外面にはスノコ状圧痕があり、内面には煤が付着する。

Ｄ類（第23図　11、12）Ｄ類は底部は手づくね成形後未調整で、口縁は内湾する。口縁外面にはヨコナデを行うが、ヨコナデは粗く、指頭圧痕が明瞭に残る。口縁内面にはヨコナデを行う。

E類（第23図　13）E類は底部を欠損するが口縁は内湾気味である。口縁内外面にはヨコナデを行い、D類のような口縁外面の指頭圧痕は見られない。

F類（第23図　14）F類は口縁が内湾し、器高が低い。口縁内外面には丁寧なヨコナデを行い、底部中央部は欠損しているが底部外面端にはナデを行う。

G類（第23図　15）G類は型押し成形によってつくられたものと思われ、底部外面中央部はヘラ切り後未調整であるが口縁外面下半部には指頭圧痕と叩き板状圧痕が見られる。

H類（第23図　16、17）H類は底部を回転糸切りによって切り離したもので、口縁内外面にはヨコナデ、底部内面にはナデを行う。

受皿付灯明皿（第23図　18、19）受皿付灯明皿はかわらけの上に高坏の脚のようなものを逆につけたもので、底部は回転糸切りを行う。19は口縁部に注口がつく。

6　瓦質土器（第23図）

20、21は脚付の鉢形土器で、20は外面はヨコナデ、内面は連続した回転ナデを施す。21は外面はヨコナデ、内面は上半部に断続した回転ナデ、下半部に連続した回転ナデを施す。

7　弥生土器（第24、25図）

弥生土器は2区の貝塚及び包含層から出土し、広口壺、無頸壺、甕、鉢、高坏、器台がある。時期は弥生中期中葉～中期後葉のものである。

甕（第24図　1～12）甕は凹線の有無、指頭圧痕突帯の有無、口縁の形態によって3類6群に分類できる。

A類（第24図　1）A類は口縁端部に凹線を巡らさないもので、口縁下端部をわずかに下方へつまみ出す。口縁内外面ともヨコナデ調整を行う。

B－1類（第24図　2、3）B－1類は口縁端部に1条の凹線を巡らすもので、凹線の上には刻み目がある。口縁上下端部をわずかにつまみ出す。2は内面はヨコナデ調整を行い、外面は頸部はヨコナデ調整、胴部はハケメ調整を行う。3は口縁、頸部内外面ともヨコナデ調整を行い、胴部はハケメ調整を行う。

B－2類（第24図　4、5）B－2類は口縁端部に1条の凹線を巡らすもので、凹線の上には刻み目がない。口縁上端部をわずかにつまみ出す。4は口縁は内外面ともヨコナデ調整を行い、胴部は内外面ともハケメ調整を行う。5は口縁内外面ともヨコナデ調整を行い、胴部は外面はハケメ調整、内面はナデ調整を行う。

B－3類（第24図　6）B－3類は口縁端部に2条の凹線を巡らすもので、口縁上端部を上方へ大きくつまみ出す。頸部内面には段がつき、口縁内外面ともヨコナデ調整を行い、胴部は内外面ともハケメ調整を行う。

C－1類（第24図　7～10）C－1類は頸部に指頭圧痕突帯を巡らすもので、口縁端部には2条または3条の凹線が巡る。口縁はくの字に屈曲し、端部近くでは内湾気味に立上がる。口縁上端部は上方へ大きくつまみ出し、口縁下端部も水平方向へわずかにつまみ出す。7は頸部以下が欠損し指頭圧痕突帯の有無は不明であるが、9、10と口縁の形態が同じであることからC－1類に加えた。口縁には3条の凹線を巡らす。8も頸部以下が欠損し指頭圧痕突帯の有無は不明であるが、9、10と口縁の形態が同じであることからC－1類に加えた。口縁には2条の凹線が巡り、凹線の上には刻み目がある。9は口縁に3条の凹線が巡り、凹線の上には刻み目がある。10は口縁に3条の凹線を巡らせ、外面は摩滅が著しいため調整は不明であるが、内面は口縁はヨコナデ調整、胴部はハケメ調整を行う。

C－2類（第24図　11、12）C－2類は頸部に指頭圧痕突帯を巡らすもので、口縁端部には3条または4条の凹線が巡る。口縁は上下端部を大きくつまみ出すくりあげ口縁である。11は口縁に4条の凹線が巡り、その上には上下2段に傾きの異なる刻み目がある。さらにその上には3個1単位の円形浮紋がある。口縁は内外面ともヨコナデ調整を行い、胴部は内外面ともナデ調整を行う。12は口縁に3条の凹線が巡り、その上には刻み目がある。

台付甕（第25図　24、25）24、25は台付甕の脚部である。24は内面はナデ調整、外面はヘラミガキを行う。25は内面はナデ調整を行い、ヘラ状工具圧痕が見られる。外面はハケメ調整を行う。

壺（第25図　13～18）壺には広口壺と無頸壺があり、広口壺は凹線の有無、口縁の形態によって2類3群に分類できる。

A類（第25図　13）A類は口縁端部に凹線を巡らさないもので、口縁下端部を外下方へつまみ出し、端面には櫛描斜線文がある。口縁内外面ともヨコナデ調整を行う。

B－1類（第25図　14）B－1類は口縁端部に凹線を巡らすもので、口縁上端部を上方へつまみ出し、口縁下端部も下方へわずかにつまみ出す。口縁端部には2条の凹線を巡らす。口縁内外面ともヨコナデ調整を行い、内面には櫛描斜格子文がある。

B－2類（第25図　15、16）B－2類は口縁端部に凹線を巡らすもので、口縁上端部を上方へ、下端部を水平方向へつまみ出す。口縁端部には3条の凹線が巡り、頸部には貼付突帯が巡る。15は凹線の上に刻み目があり、口縁内外面ともヨコナデ調整を行う。頸部には断面円形の貼付突帯が巡る。16は口縁内外面ともヨコナデ調整を行うが頸部内面はハケメ調整を行う。頸部には断面三角形の貼付突帯が巡る。

無頸壺（第25図　17）17は口縁に3条の凹線が巡りその上に刻み目がある。凹線の下方には流水紋がある。内面はハケメ調整であるが口縁付近はヨコナデ調整である。

頸部（第25図　18）18は口縁を欠損しているが頸部には2条の断面三角形の貼付突帯が巡る。外面は頸部はハケメ調整後ナデ調整を行うが胴部はハケメ調整を行う。内面はナデ調整を行うがヘラ状工具圧痕がある。

鉢（第25図　19）19は口縁が内湾し口縁端部を左右につまみ出し面をなす。内外面ともハケメ調整を行うが、口縁はヨコナデ調整を行う。外面には刺突紋がある。

高坏（第25図　20～23）高坏は坏部の形態によって２つに分類できる。

A類（第25図　20、21）Ａ類は坏部が内湾し、口縁端部は左右につまみ出し面をなす。20は口縁外端部に刻み目があり、外面は摩滅が著しいため調整は不明であるが内面はヨコナデ調整を行う。21は口縁端面に４条の凹線が巡り、その上に刻み目がある。さらにその上には棒状浮紋があり刻み目をつける。

B類（第25図　22、23）Ｂ類は口縁が直立気味に外傾し、口縁端部は面をなす。外面には現存する状態で３条の凹線が巡る。23は22に伴うと思われる脚で、３条の断面三角形の貼付突帯とその下方に現存する状態で３条の沈線が巡る。内面はナデ調整を行う。

器台（第25図　28）28は３条の断面三角形の貼付突帯を巡らせ、内外面とも突帯よりも下方はハケメ調整を行うが、突帯裏側の内面はナデ調整を行う。

８　須恵器（第26図）

須恵器は残存状態が良好ではないが坏蓋１点、坏身３点、壷１点、甕１点が出土した。２は坏身でＴＫ１０型式であると思われる。３，４は坏身でＴＫ２０９型式またはＴＫ２１７型式である。５は高台付きの小形壷である。

９　土師質土器（第26図）

７は口径に対して器高が低く口径13.8㎝、器高4.1㎝である。口縁はやや内湾し口縁端部は細く丸くおさまる。底部は回転糸切りである。７～10は口縁が内湾気味に立上り口縁端部は肥厚して外反する。底部は回転糸切りである。８は口径15.6㎝、器高4.9㎝で、色調は淡灰褐色である。９は口径16.1㎝、器高5.2㎝で色調は淡灰白色である。10は口径16.1㎝、器高5.2㎝で、色調は淡灰白色である。11、12は坏身の底部で11は高台内側に内傾する面をもち、底部内面は横方向のナデ調整を行っている。12はいわゆる足高高台付坏の底部で高台は大きく開く。13は粗製で厚手の甕で、内面はヘラケズリの後ナデ調整を施す。

１０　瓦（第27～29図）

軒平瓦（第27図　１～８）軒平瓦は瓦当紋様によって５つに分類できる。

A類（第27図　１～３）Ａ類は三葉の花冠と唐を組み合わせた中心飾りで、その左右にＹ字状の唐草を配する。その外側に上向きの唐草を、さらにその外側にＹ字状の唐草を配する。これと類似したものが摂津高槻城から出土しており17世紀後半～18世紀の年代が与えられている。１は凸面、凹面ともナデ調整である。２は瓦当部上端を面取りし、凸面はヘラケズリ、凹面はナデ調整、瓦当部裏側は横ナデ調整を行う。３は瓦当部側端を大きく面取りし、瓦当部内区上端と側端も面取りしている。凸面は叩き成形後ナデ調整、凹面は叩き成形後、横方向のヘラケズリを行い、さらにその後にナデ調整を行っているが前端部には叩き痕とヘラケズリ痕が残る。

B類（第27図　4、5）B類は三葉の花冠と弓を組み合わせた中心飾りで、その左右に均等に2反転の有棘唐草を配する。4は茶褐色の釉薬がかかる。5は瓦当部上端を面取りし、凸面はヘラケズリの後ナデ調整、凹面、瓦当部裏側はナデ調整を行う。

C類（第27図　6）C類は2反転の唐草を配する。

D類（第27図　7）D類は均等に3反転の唐草を配するものと思われる。凹面には布目痕がある。

E類（第27図　8）E類は花冠と弓を組み合わせた中心飾りで、その左右に均等に2本の唐草がのびている。

軒桟瓦（第27図　9～11）軒桟瓦は軒平と軒丸が分離している。9は左巻きの三ツ巴紋である。瓦当部上端と内区上端を面取りし、凸面、凹面、瓦当部裏側はナデ調整を行う。10は左巻きの三ツ巴紋でその外側には8反転の唐草を配する。11は左巻きの三ツ巴紋でその外側に10個の珠文を配する。珠文は高さがあり突出した感がある。瓦当部上端と内区上端を面取りし、凸面、凹面、瓦当部裏側はナデ調整を行う。

丸瓦（第28、29図　12～24）丸瓦はすべてコビキBで、凸面はヘラナデ調整を行っているが凹面の調整技法によって6つに分類できる。

A類（第28図　12）A類は凹面に布目痕が見られ、コビキによって平滑になっているが玉縁部は未調整のままで指頭圧痕が見られる。12は玉縁をもち、側縁部はヘラ切りによって面をなすが玉縁側の凸面側縁は丸みをおびている。布目には縦方向に刺糸が見られる。

B類（第28図　13）B類は凹面に布目痕と叩き板調整痕が見られるものである。13は側端部が丸くおさまる。

C類（第28図　14、15）C類は凹面に布目痕と叩き板調整痕が見られ、一部ナデ調整を行っている。14はわずかに玉縁が残り、側縁部はヘラ切りによって面をなす。15は玉縁をもち、側端部を欠損する。玉縁部内面端部を面取りしている。

D類（第28図　16～20）D類は凹面に叩き板調整痕は認められないが、布目痕が見られ、ナデ調整と指おさえ調整が行われている。16は側端部が鋭角で端部をわずかに面取りしている。17は面取りによって側端部は丸くおさまる。18は側端部がやや丸みをおびる。19は側縁部がヘラ切りによって面をなす。20は玉縁をもち、側縁部はヘラ切りによって面をなす。玉縁部内面には布を抜いた痕跡が見られる。

E類（第29図　21）E類は布目痕と網目痕が見られ、一部ナデ調整を行っている。21は玉縁をもち、側端部は鋭角で凸面側に面取りをしている。

F類（第29図　22～24）F類は布目痕は認められないが、網目痕が見られナデ調整を行っている。22は側端部が丸くおさまる。23は玉縁をもち、側端部は鋭角で端部を面取りする。24は玉縁をもち、側端部はヘラ切りによって面をなす。

平瓦・桟瓦（第29図　25～27）平瓦は全容を知れるものがなく隅の部分が残るのみである。25は凸凹面ともナデ調整を行う。26は桟瓦で凸面はヘラケズリ、凹面はヘラナデ調整を行う。27は摩滅が著しいために調整は不明であるが隅に方形の切り込みがある。

１１　木製品（第30～32図）

木製品には建築材、屋根材、木簡、下駄、桶、曲物、箸、切匙等がある。ここでは木簡、下駄、桶、曲物、箸、切匙を取り扱う。

木簡（第30図　１～４）木簡は４点出土した。すべて荷札木簡である。１は長さ20.4cm、幅2.7cm、厚さ0.2cmで、上部に切り込みがある。表には「見随院様香物源六」、裏には「もろげえび」と書かれている。見随院は文献では確認できないが高貴な女性であろう。源六は名字は不明であるが、幕末頃城主荒尾氏の命をうけて臘の原料の買いつけを行った景山源六と同一人の可能性がある。もろげえびはテナガエビの一種である。２は長さ20.4cm、幅3.4cm、厚さ0.3cmで、上部に切り込みがある。表には「見随院様香物源六」、裏には「干いか　一つ」と書かれている。３は長さ20.0cm、幅2.2cm、厚さ0.2cmで下部が尖る。表には「見随院様香物源六」、裏には「鯛三つ」と書かれている。４は長さ14.1cm、幅2.3cm、厚さ0.3cmで、表には「見随院様かう物源六」と書かれ、裏には４文字が確認できるが判読できない。

下駄（第31図　５～７）５～７は連歯下駄で犬部の形態は隅丸長方形である。５、７は歯の幅が犬部の幅と同じであるが、６は歯の幅が犬部の幅よりもやや大きい。５は前歯の方が摩滅し、６は後歯の方が摩滅している。７は５、６と比べて鼻重能が長い。

桶（第31図　８）８は桶の底板で桶の直径は２６cm強になると思われる。

板状製品（第31図　９）９は用途不明の板状製品で中央に直径4.0cmの孔を穿ち、板の一方の縁には２孔を穿つ。

箸（第32図　10～12）箸はすべて白木を不整に削って成形したもので、10は長さ27.6cm、直径0.5cm、11は長さ28.5cm、直径0.5cm、12は長さ26.7cm、直径0.6cmをはかる。

切匙（第32図　13）切匙とは擂鉢ですったものを掻き出す時に使うもので、13は長さ23.0cm、柄の幅2.4cmをはかる。柄尻部は尖っている。

１２　漆　　器（第32図）

漆器には蓋、椀がある。17は蓋で口縁は内湾し、内面は赤色塗、外面は黒色塗である。外面には紋様がある。18～23は椀ですべてロクロ挽きによる成形で、内面は赤色塗、外面は黒色塗である。残存状態は良好ではないが、器壁が薄く高台が低いもの（18～20）と器壁が厚く高台が高いもの（21～23）とに分けられる。外面には２重または３重の圏線内に紋様を描く。

１３　土　　錘（第33図）

土錘は44点出土しており、すべて中心に孔を穿った管状土錘である。長さ、最大径及び形態によって４類７群に分類できる。

Ａ類（第33図　１～４）Ａ類は22点あり、長さ2.3～4.3cm、最大径0.8～1.0cmをはかり、縦断面形は紡錘形で細身である。

Ｂ－１類（第33図　５～７）Ｂ－１類は５点あり、長さ5.1～5.8㎝、最大径1.8～2.8㎝をはかり、円筒形に近く両端がややすぼまる。５は指整形の痕跡がある。

Ｂ－２類（第33図　８）Ｂ－２類は４点あり、長さ5.3～5.4㎝、最大径1.7～2.4㎝をはかり、縦断面形は紡錘形である。

Ｃ－１類（第33図　９）Ｃ－１類は２点あり、長さ6.8～7.8㎝、最大径3.6～3.9㎝をはかり、円筒形に近く両端がややすぼまる。

Ｃ－２ａ類（第33図　10）Ｃ－２ａ類は１点のみで長さ7.4㎝、最大径2.8㎝をはかり、縦断面形は紡錘形である。指整形の痕跡がある。

Ｃ－２ｂ類（第33図　11）Ｃ－２ｂ類は１点のみで長さ7.7㎝、最大径2.6㎝をはかり、円筒形に近く両端がややすぼまる。指整形の痕跡がある。

Ｄ類（第33図　12～15）Ｄ類は９点あり、長さ7.7～9.7㎝、最大径2.6～4.3㎝をはかり、円筒形に近く両端がややすぼまる。指整形の痕跡がある。

１４　金属製品（第33図）

煙管（第33図　16）16は煙管の吸口で肩がつき、肩は全体から打ち出してつくっている。長さ6.6㎝、径1.0㎝をはかる。

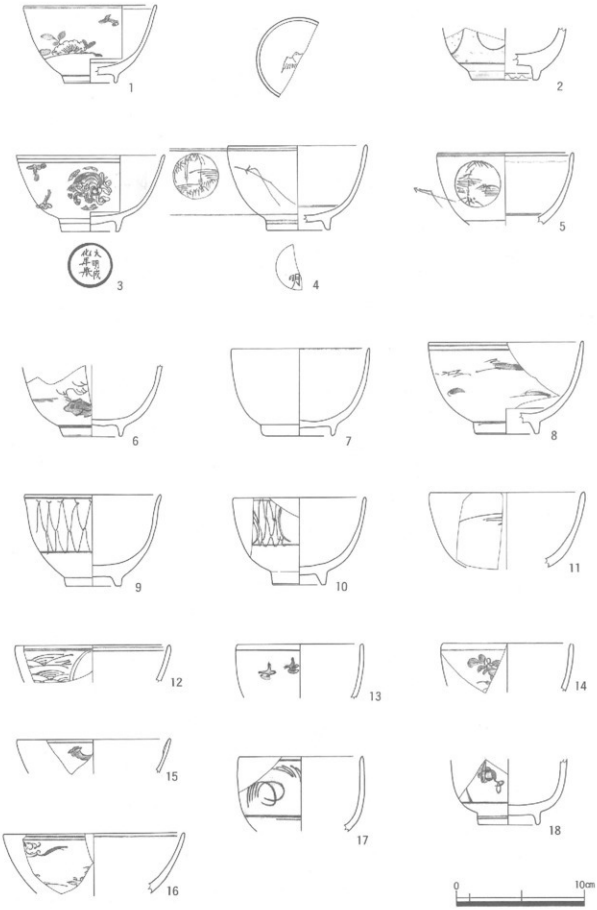
古銭　古銭は洪武通宝（洪武元年　1368年）と寛永通宝（寛永年間　1624年～）が出土した。

１５　動物遺存体

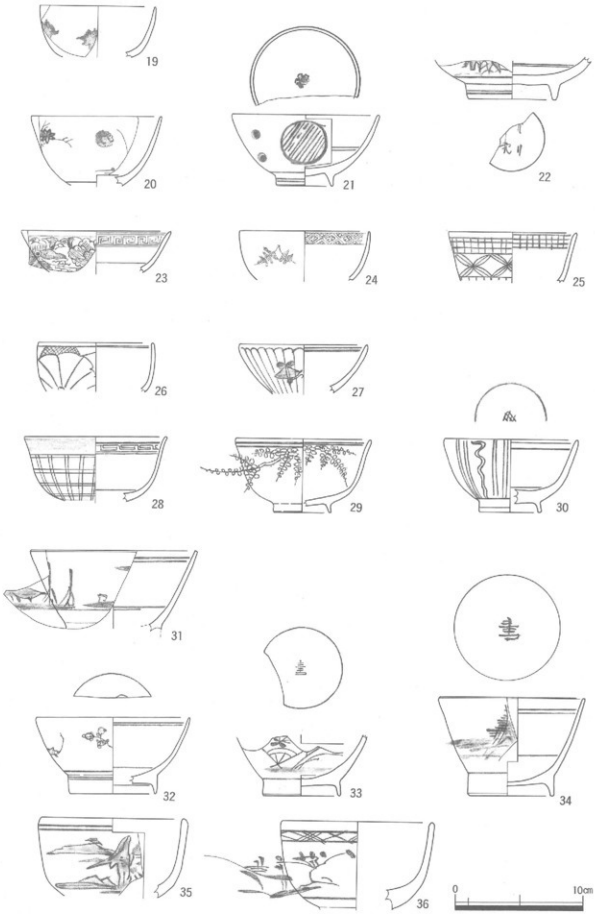
哺乳類　哺乳類にはイヌ、シカ、ウマ、イルカがある。

魚類　魚類にはスズキ、フグがある。

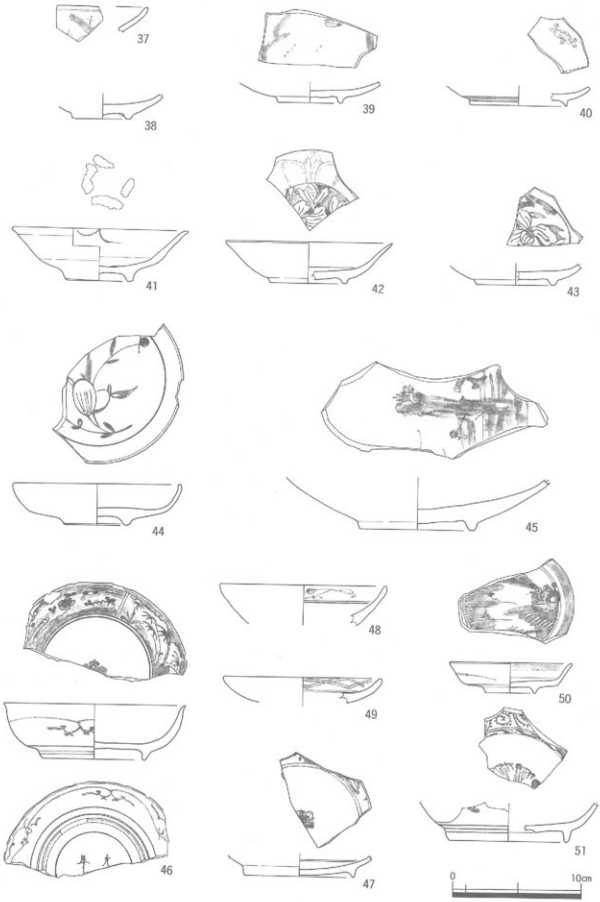
貝類　貝類はサルボウガイが大部分を占め、他にはサザエ、ハマグリ、ヤマトシジミ、アカニシがある。



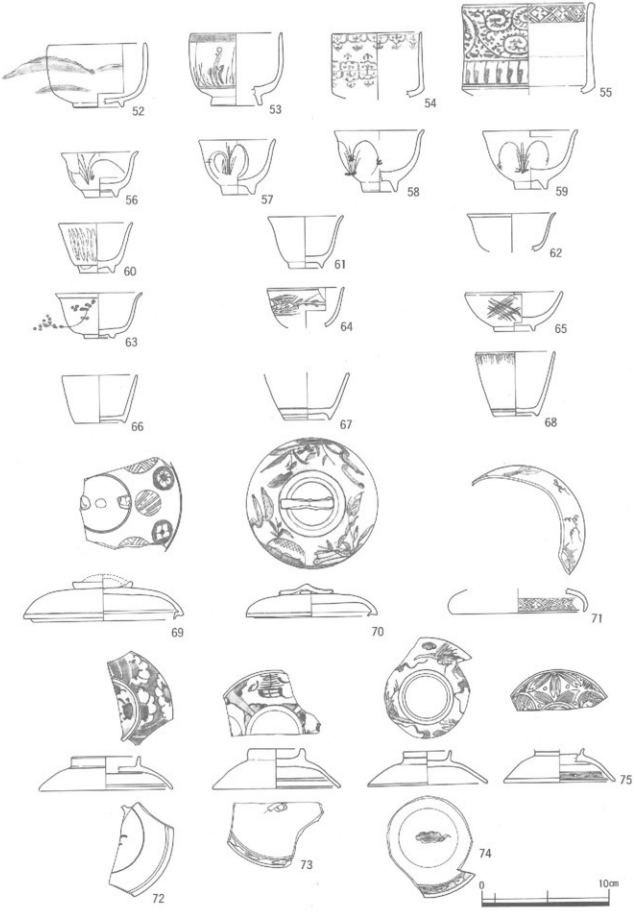
第12図　伊万里実測図



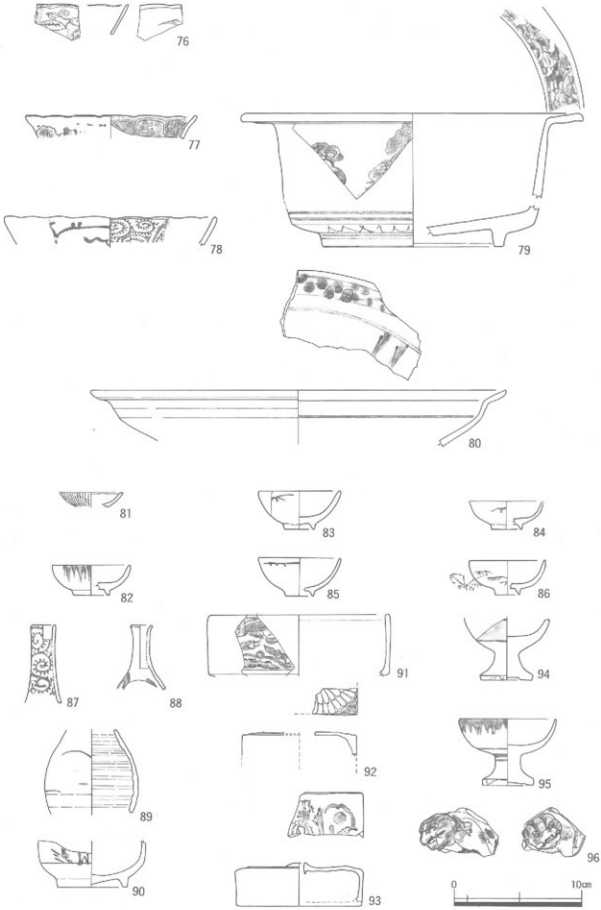
第13図　伊万里実測図



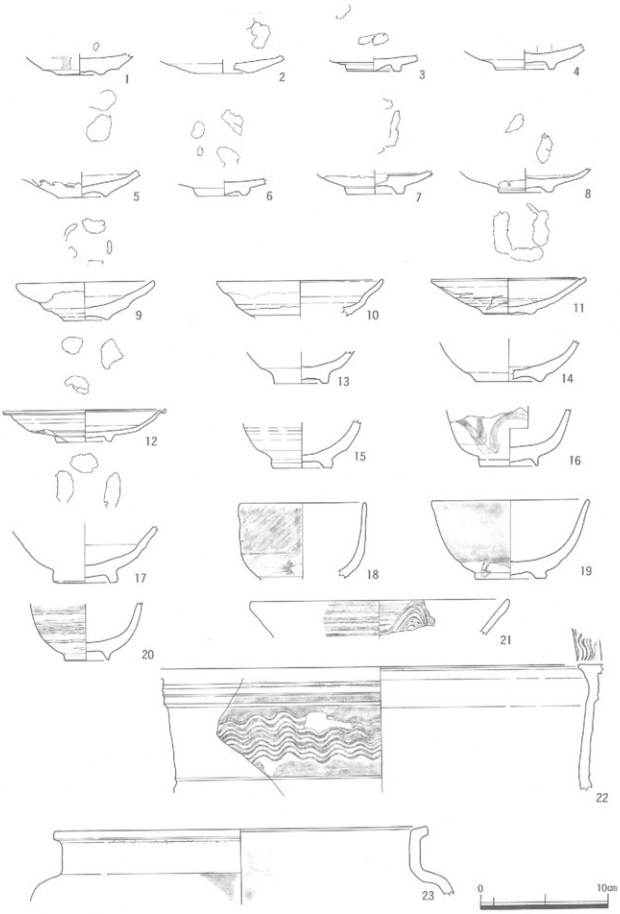
第14図　伊万里実測図


52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
0
10cm

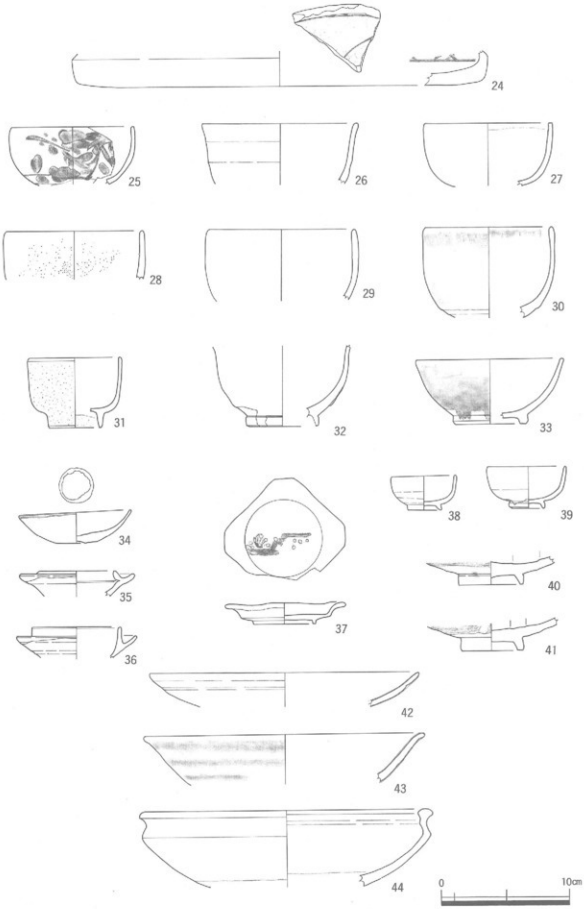
第15図　伊万里実測図



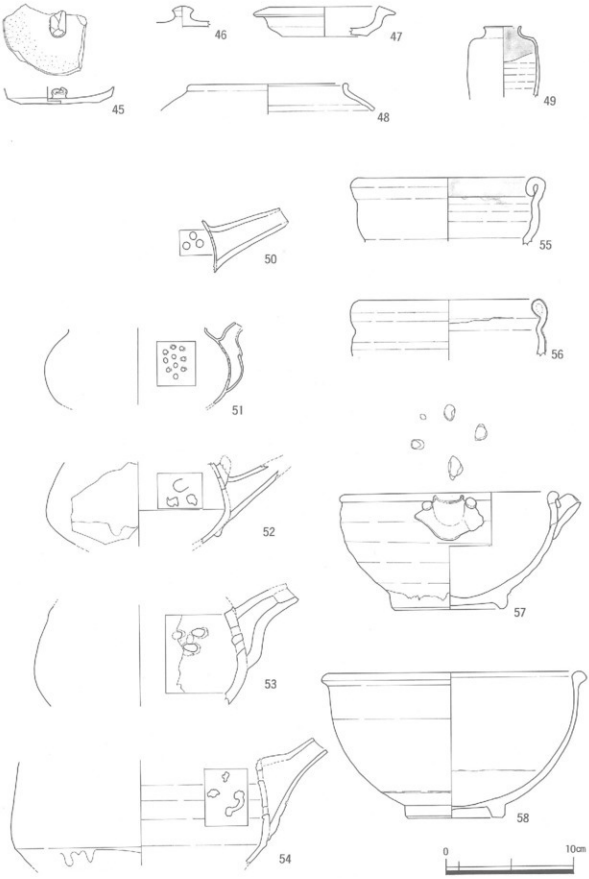
第16図　伊万里実測図



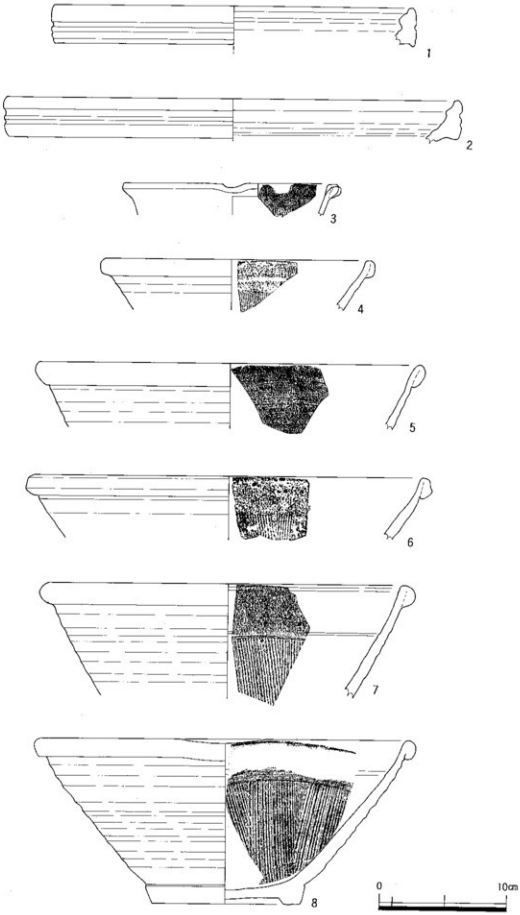
第17図　唐津実測図



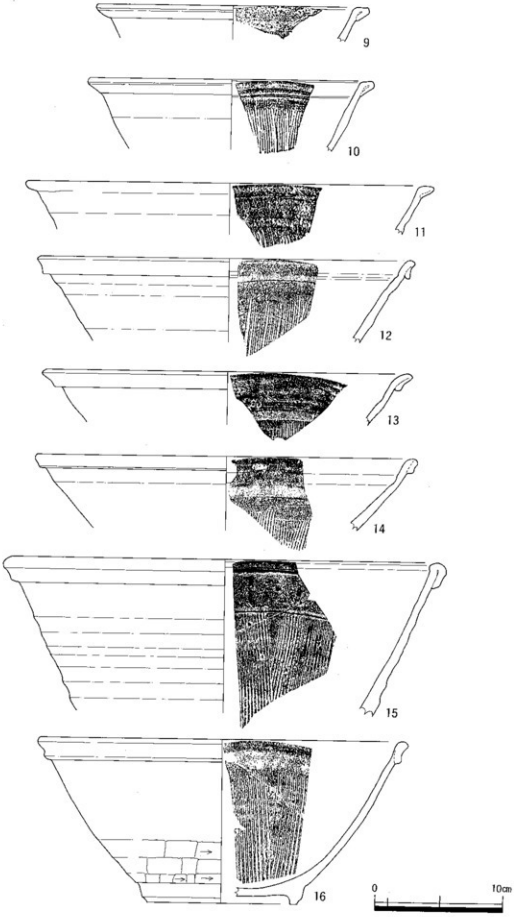
第18図　陶器実測図



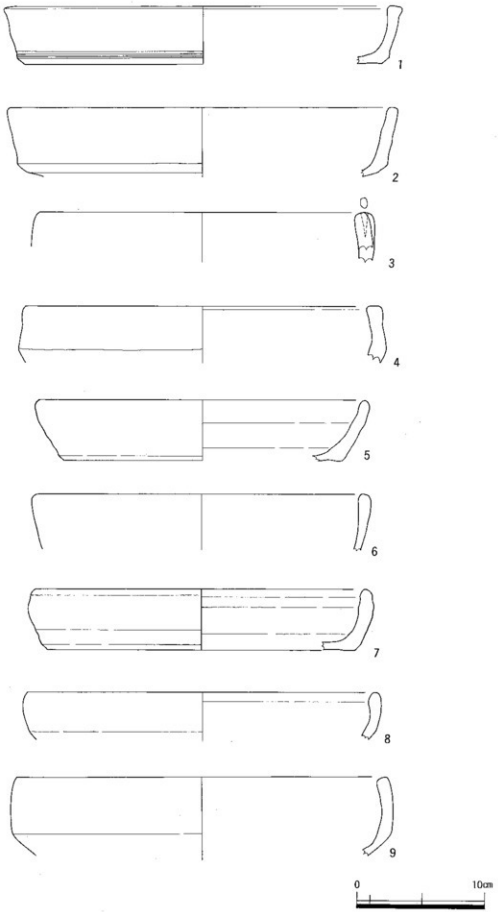
第19図　陶器実測図



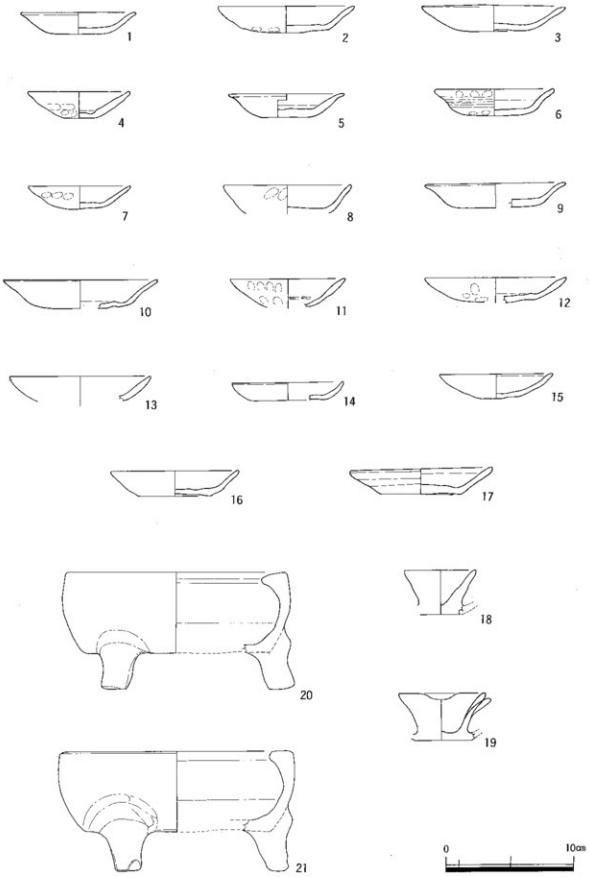
第20図　擂鉢実測図



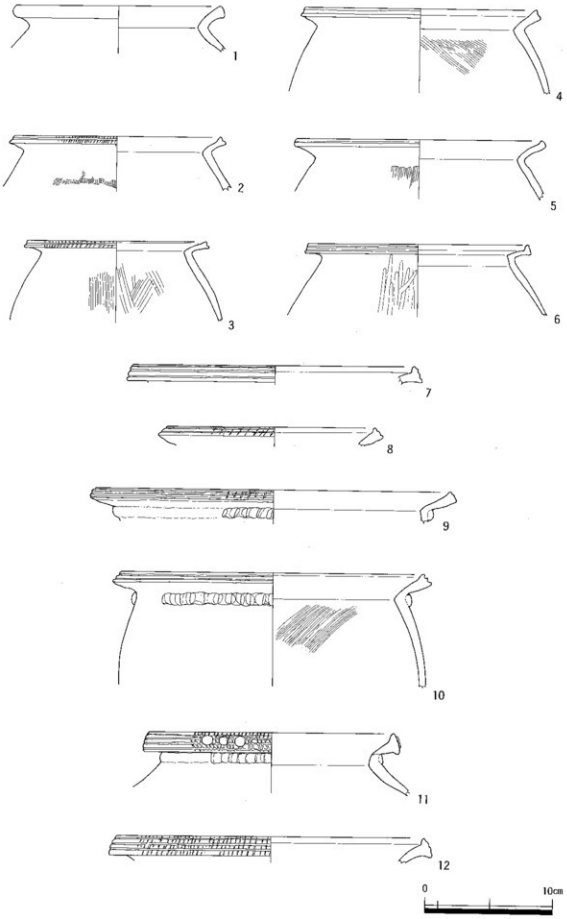
第21図　擂鉢実測図



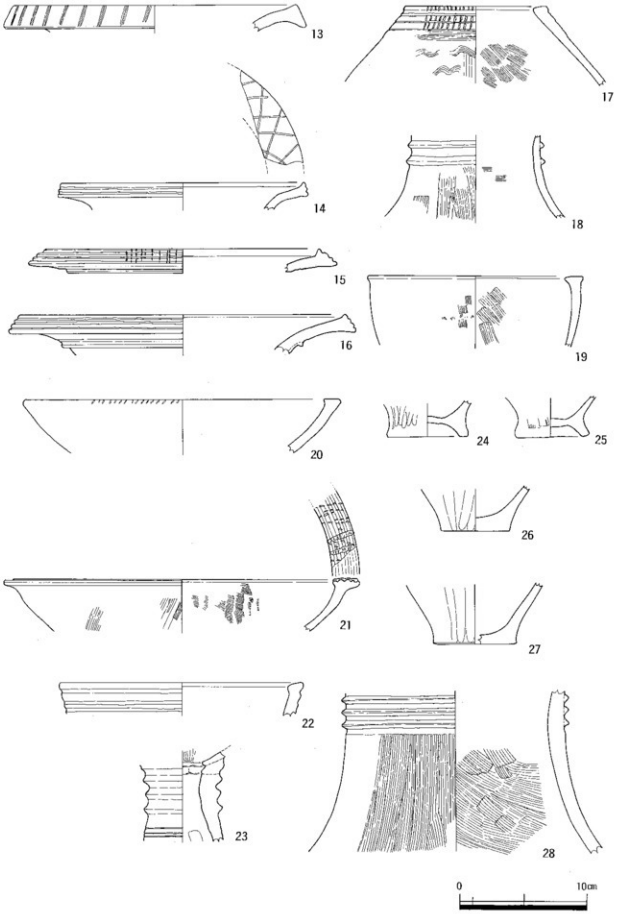
第22図　焙烙実測図



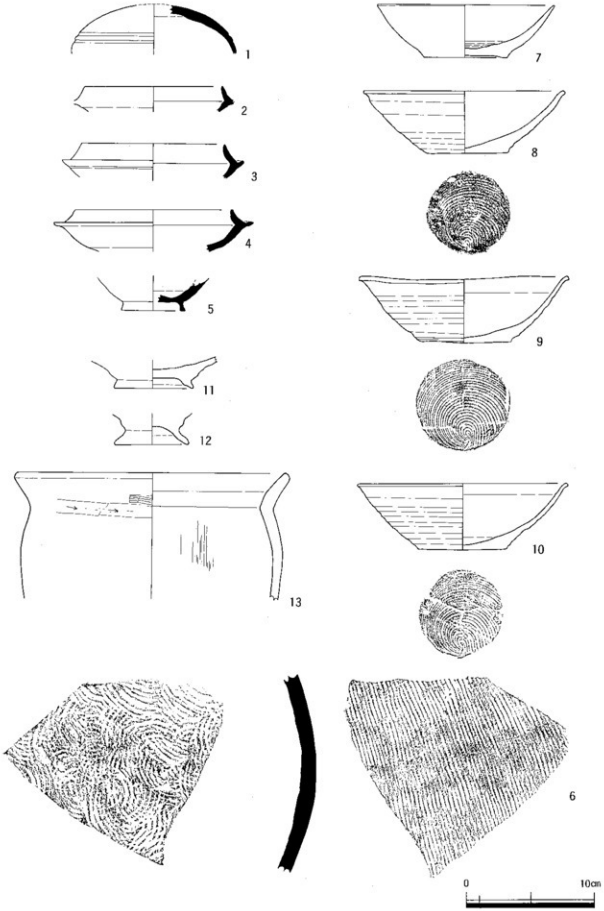
第23図　かわらけ・瓦質土器実測図



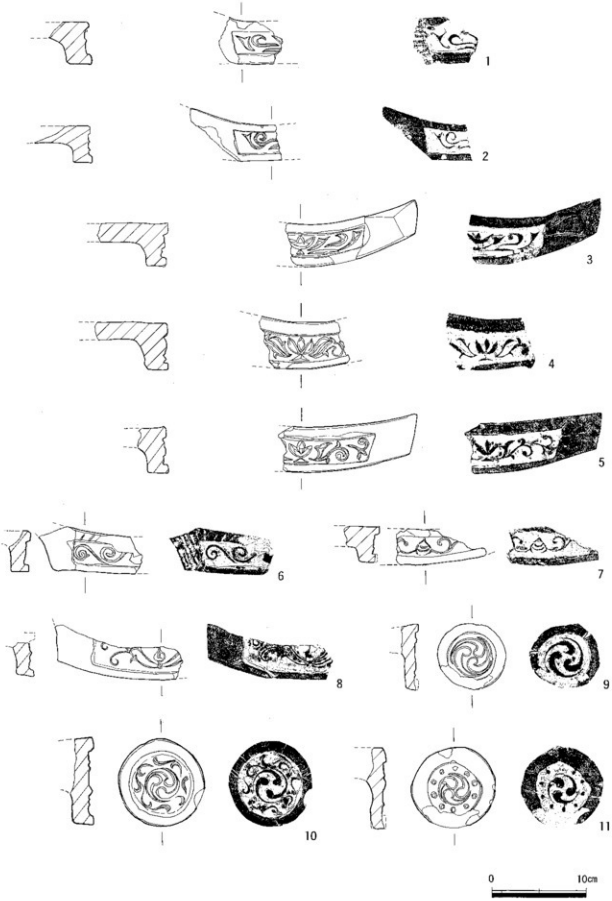
第24図　弥生土器実測図



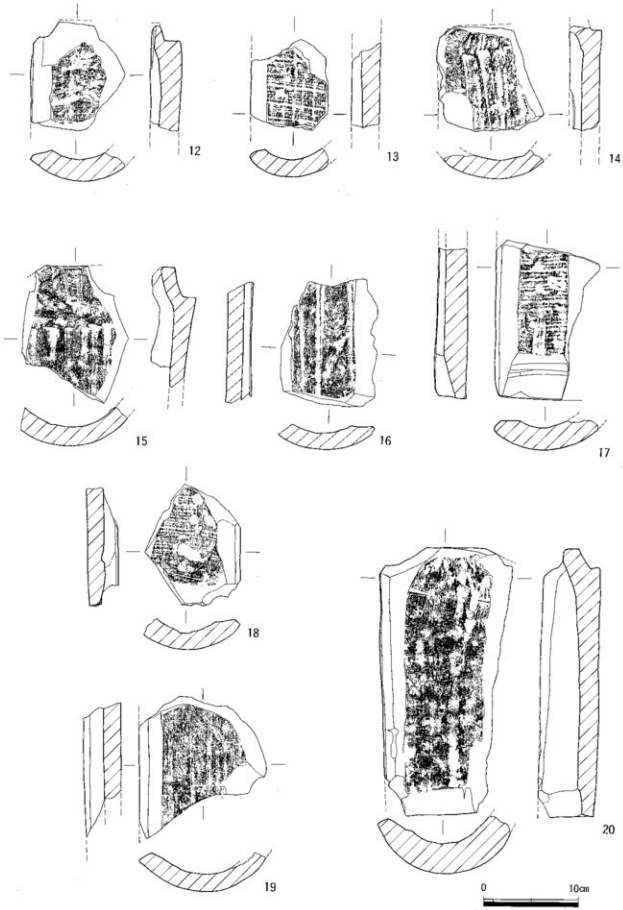
第25図　弥生土器実測図



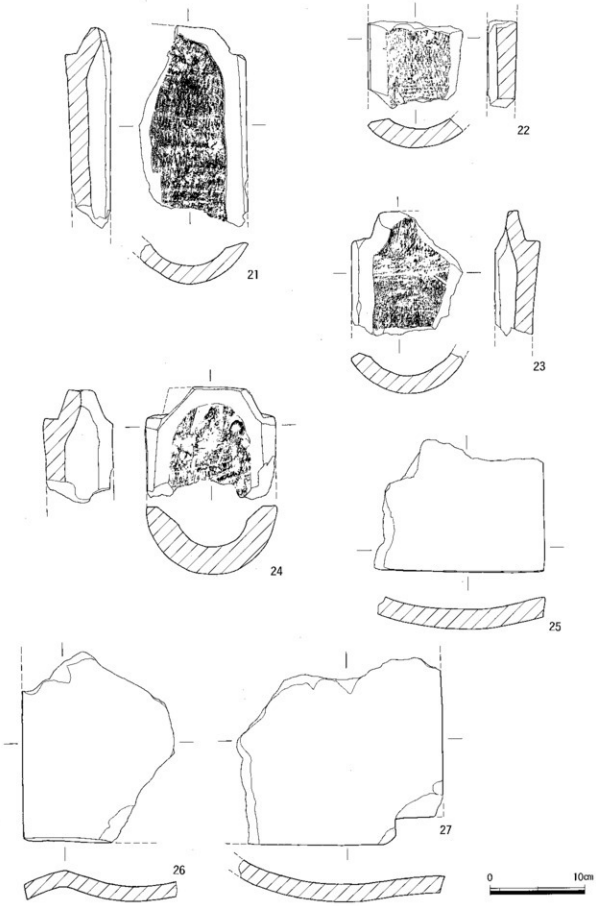
第26図　須恵器・土師質土器実測図



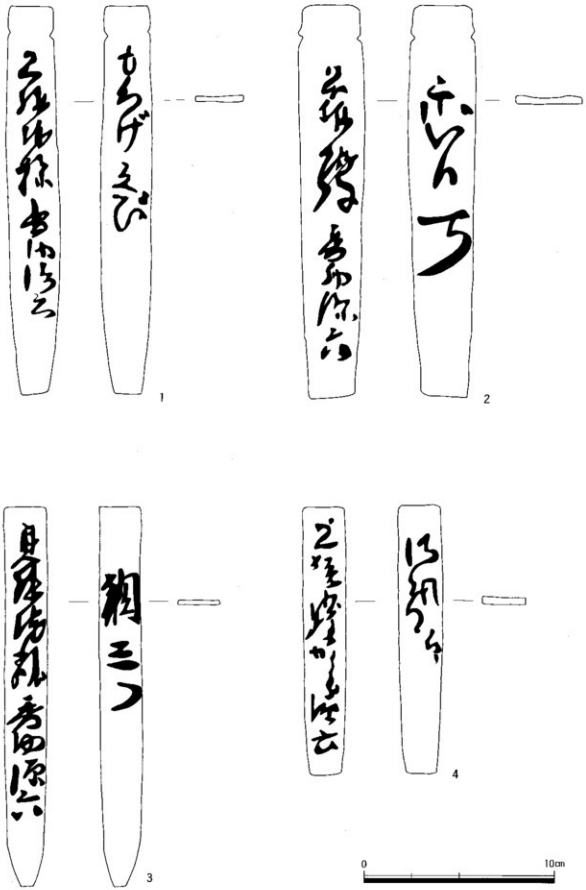
第27図　軒平瓦・軒桟瓦実測図



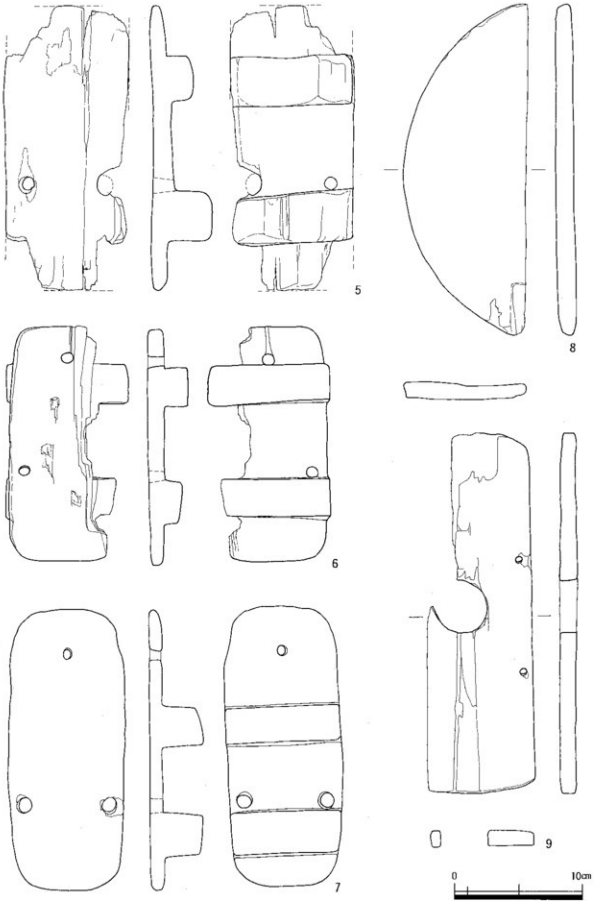
第28図　丸瓦実測図



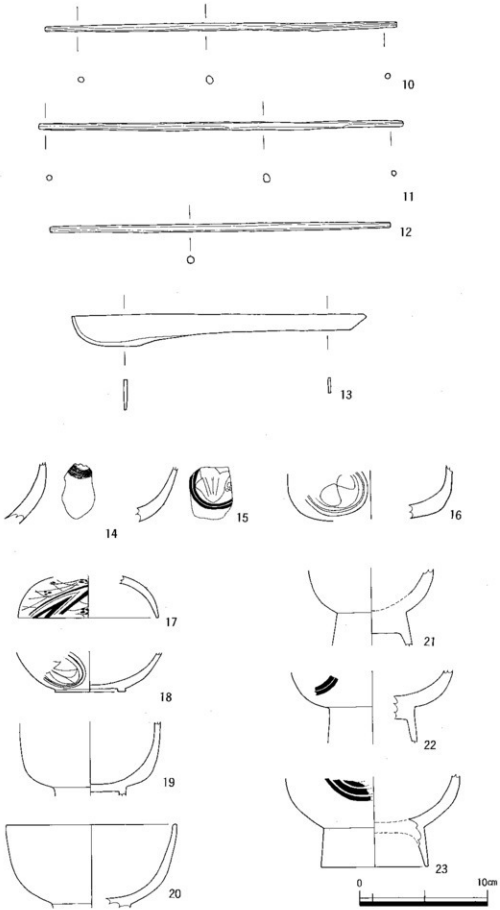
第29図　丸瓦・平瓦・桟瓦実測図



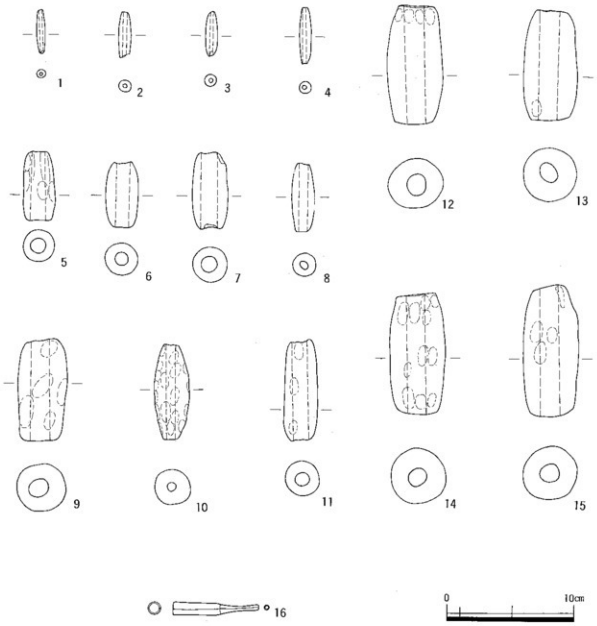
第30図　木簡実測図



第31図　木製品実測図



第32図　木製品・漆器実測図



第33図　土錘・金属製品実測図

6　まとめ

1　層位と旧地形

第１層は近現代盛土層、第２層は明治以降の水田耕作土層、第３層は江戸時代後半の堆積層、第４層は近世水田耕作土層、第５層は近世堆積層、第６層は弥生時代中期の貝層、第７層は弥生時代中期の包含層、第８層以下は自然堆積の砂層である。１、３区、２区の南東側は第１→２→３→８の層序である。第３層は18世紀後半～幕末を中心とする遺物を包含しこの時期の遺構面となっているが、１区、２区の南東側では明治以降の水田耕作によって削平されておりほとんど残存していない。２区は中央部では第１→２→４→５→６→７→８の層序であるが、北西側では第４層以下は中央部と同じであるが、第１層以下、昭和初期整地層→近代旧表土→近世～近代整地層→第４層となっている。２区の北西側では明治以降も耕作地化されず宅地として利用されたためこのような層序となっている。貝塚（第６層）は２区の中央部から北西側にかけての緩斜面に形成されていたものと思われるが北西側は近世に削平されている。

ここで旧地形を推定してみると加茂神社の社殿の下には岩礁性の岩盤が露出しており、清洞寺岩のような上に神社がつくられたものと思われる。また、米子城跡９遺跡ではこの岩盤が北へ傾斜していることを確認している。このような地形は久米第１遺跡でも確認されており、崖錐性堆積層や傾斜面水底部から縄文時代前期初頭と晩期を中心とする土器が出土している。このように調査地では縄文時代には岩礁性の岩盤で構成される汀線が迫っていたものと思われる。しかし、４区では現地表面より約３ｍ掘削したが、砂とシルトの互層が厚く堆積しておりこの岩盤を確認できず、基盤面は加茂神社を頂上にして北側へ傾斜するが、南側は断崖であったものと考えられる。

第８層検出面では１、３、４区は比較的安定した微高地で、２区は北西へと緩やかに傾斜する斜面となっている。１区の北西側では弥生中期の土器が出土し、２区では弥生中期の貝塚と遺物包含層を形成している。これらは微高地の縁辺部に位置するものと思われ、微高地上には当該期の集落が存在し、その縁辺部（谷状地形）に廃棄物を廃棄したものと思われる。このような集落の存在は以前より指摘されている。また、３区では須恵器が比較的まとまって出土しており、城山に存在したと思われる古墳群またはこれを形成した集落の存在が考えられる。４区では12～13世紀の遺構、遺物を検出し当該期の集落の存在が考えられる。

以上のように古墳時代～中世の遺物の量は多くはないが、弥生時代以降、断続的に集落が形成されたものと思われる。

2　城下町の形成と武家屋敷の変遷

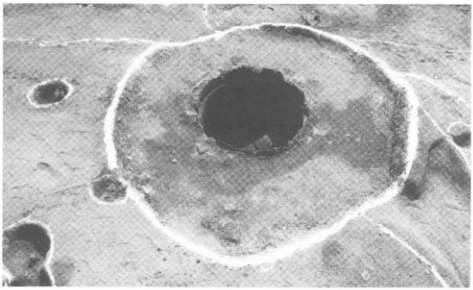
米子城城下町の武家屋敷の変遷は絵図によってある程度知ることができる。城下町の絵図については数枚が現存しているが、このうち人名を明記しているものには「伯耆国米子平図」（宝永６年　1709年）、「湊山金城米子新府」（享保５年　1720年）「米子城市図」（安政年間）

「米子城下之図」（明治３年　1870年）がある。これらの絵図によると調査地は「伯耆国米子平図」と「湊山金城米子新府」では木村文治、荒尾与左エ門、築瀬分左エ門、廃宅、加茂神社、鷲見権之丞の屋敷となっており、「米子御城下図」では岩越、岡本、築瀬、空き家、加納、加茂神社、勘定場となっている。さらに「米子城下之図」では岩越、空き家、中島、山部、加茂神社、空き家となっている。しかし、これらの絵図だけでは絵図が存在しない時期については不明であり、発掘調査の助けを借りなければならない。屋敷の変遷は政治的背景が濃く、城主の交替に伴ってその家臣の入れ替えが行われることを反映しており、今回の調査では幕末から明治にかけての屋敷の廃棄または修理を示唆する１区の瓦溜り、３区のＳＫ－33を検出し、絵図による屋敷の変遷を裏付けることができたことは非常に意義深いことである。１区の瓦溜りは屋敷の隅に廃棄されたものと考えるならば、これに隣接するＳＤ－10は明治24年の地籍図の畦畔と一致することとあわせて考えるとこれは屋敷の境界を示す溝であると考えられ、屋敷内の利用の一端がうかがえる。また、２区の南東側で検出した屋敷の廃棄跡は17世紀第１四半期～第２四半期の陶磁器が出土しており、この時期幅で屋敷が存在し、17世紀第２四半期に廃棄されたものと考えられる。このことは既に17世紀初頭にはこの部分については城下町の町割りが完成し、武家屋敷が形成されていたものと考えられ、絵図の存在しない時期の武家屋敷の存在及び変遷を伺い知ることができる。城下町の形成については寛永９年（1632年）には町割りがほぼ完成していたということが文献によって確認できる。米子城跡１遺跡では８世紀後半～近世の遺物が出土しており、８世紀後半以降、地盤が安定しており、これに伴ってこの地域への進出が行われて、15世紀後半～16世紀にかけて積極的な整備がなされ、16世紀末～17世紀初頭に米子城築城に伴う大規模な埋立造成が行われている。この地は内膳丸から清洞寺岩にかけて尾根がのび微高地であったため水害を防げるうえに水捌地質で水利性に富み、中海に近いという立地的条件により港として比較的早い時期から整備されたものと思われる。一方、当遺跡の１、３、４区では18世紀以前の江戸時代の遺物が出土しておらず、しかも江戸時代後期の遺構面の直下は河川堆積物の粗砂が厚く堆積し弥生時代以来の旧地形を呈しており、１、３、４区の部分については屋敷の形成が18世紀まで下る可能性がある。つまり、17世紀前半には城下町の町割りは完成していたが、屋敷の整備については中海に近い部分（米子城跡１遺跡、米子城跡７遺跡２区）は17世紀には既に行われていたがそれ以外の部分については18世紀まで下るものと考えられる。18世紀初頭に書かれた「伯耆国米子平図」と「湊山金城米子新府」には人名が記載されているが屋敷の境界線が書かれていない部分があり、何らかの意図で境界線を書いていないのかもしれないが、これは屋敷割は決まっていたが屋敷の整備、建設が行われていなかった可能性がある。このことは絵図からうかがえる17世紀末～18世紀初頭の整備の際の遺物が少ないということからも考えられる。

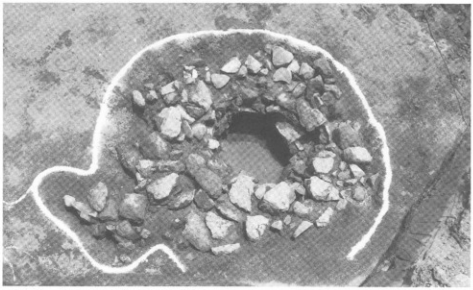
今回の調査では屋敷の形成の開始時期と幕末から明治にかけての屋敷の変遷を確認できたが、今後、これらの絵図による屋敷の変遷を裏付けることができ、その変遷の時期を具体的に確定することができ、さらに絵図が存在しない時期の変遷についても確認できることを期待したい。

図　　版

SE－01

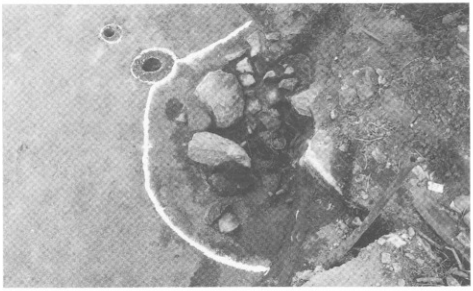


SE－03



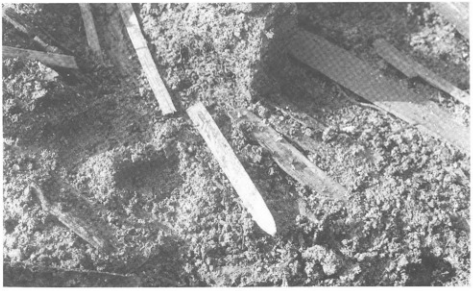
SE－04

図版 2



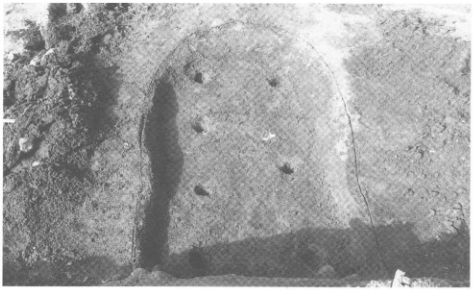
SK－47

SK－47　遺物出土状況

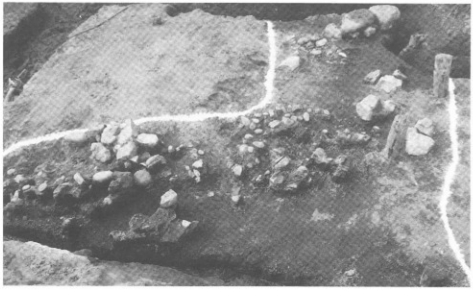


木簡出土状況

SK－46　遺物出土状況

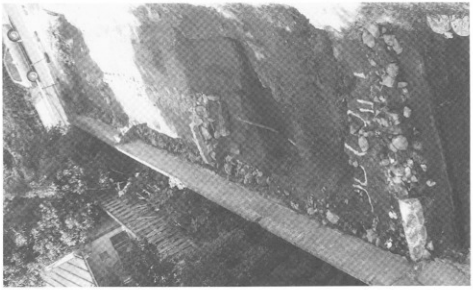


SK－46　完掘

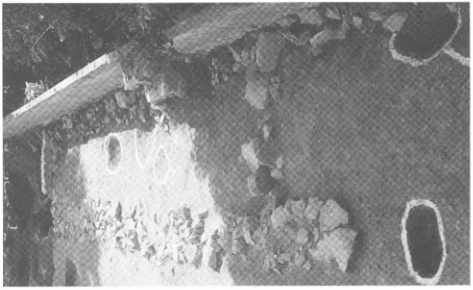


SD－38

図版 4



SB−01とSA−01



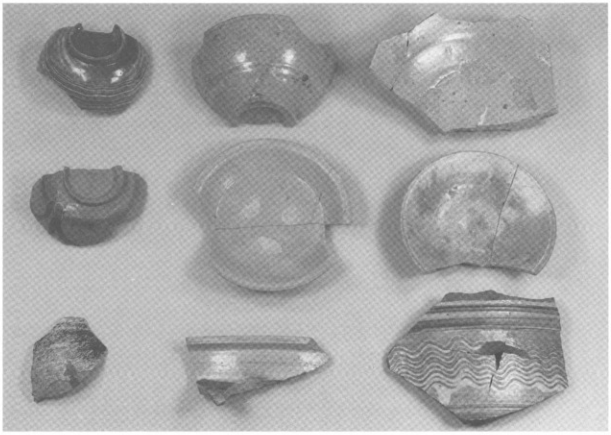
SB−01

SA−01

伊万里（17世紀）

伊万里（18世紀～幕末）

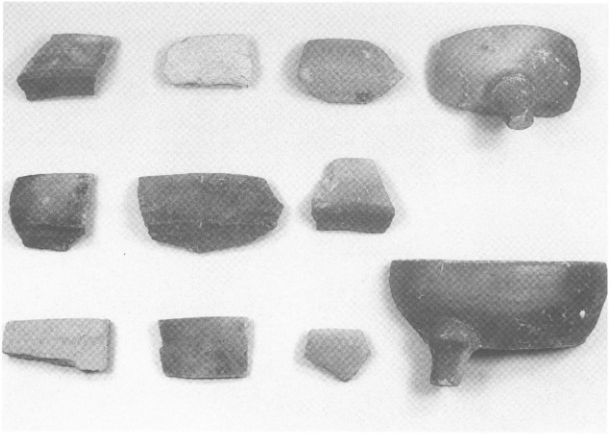
図版 6



唐　津

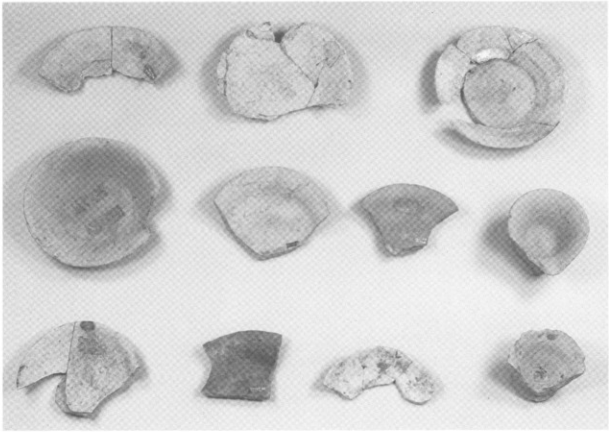
志野・清水系・石見・布志名

擂　鉢



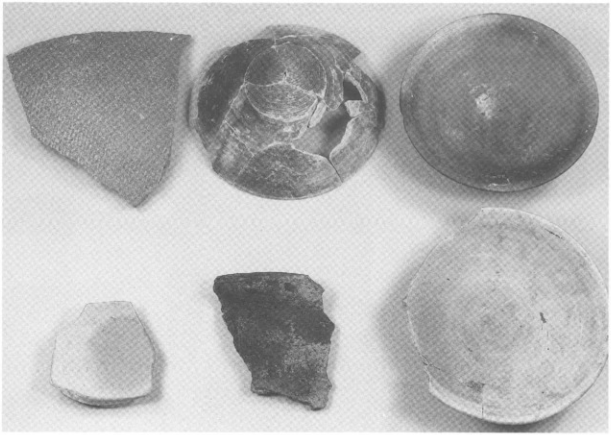
焙烙・瓦質土器

図版 8



かわらけ

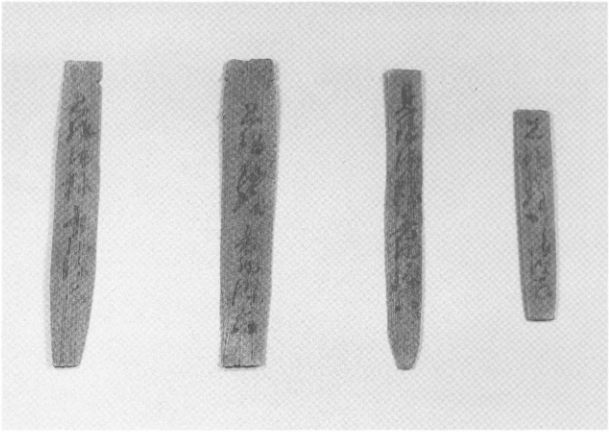
弥生土器



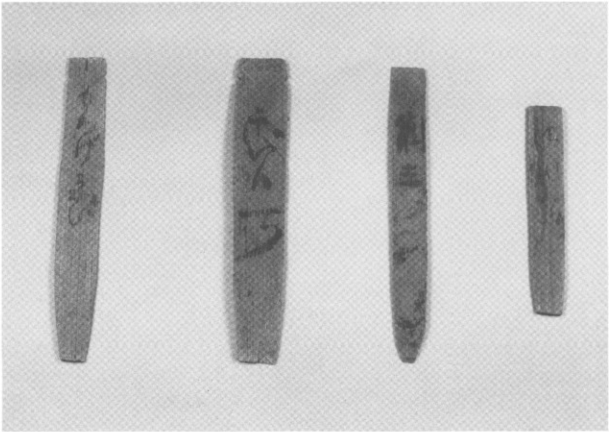
須恵器・土師質土器

軒　瓦

図版10



木簡（表）



木簡（裏）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	よなごじょうせき7いせき
書　　名	米子城跡7遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	(財)米子市教育文化事業団文化財調査報告書
シリーズ番号	15
編 著 者 名	高橋浩樹
編 集 機 関	財団法人　米子市教育文化事業団　埋蔵文化財調査室
所　在　地	〒683　鳥取県米子市中町20　　TEL（0859）22−7209
発行年月日	西暦　1996年　3月　29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
よなごじょうせき7いせき 米子城跡7遺跡	とっとりけんよなごし 鳥取県米子市 かもちょう 加茂町	31202	719	35度 25分 29秒	133度 19分 49秒	19940818〜 19941207	1.000㎡	区画整理による道路新設工事に伴う発掘調査
				35度 25分 27秒	133度 19分 50秒	19950605〜 19950625	245㎡	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主　な　遺　物	特 記 事 項
米子城跡7遺跡		弥生時代 中期	貝　塚 井　戸　1基	弥生土器、土錘	弥生中期の貝塚
		中　世	土　坑　1基	土師質土器、土錘、下駄、曲物	木簡4枚出土
		近　世	井　戸　3基 溝 土　坑	陶磁器（白磁、伊万里、唐津、志野、清水系、備前）、瓦、木櫛、箸、下駄、漆器	庭園状遺構を検出

(財)米子市教育文化事業団文化財報告書１５

米子城跡７遺跡

１９９６年３月

編集・発行　財団法人米子市教育文化事業団
〒６８３　鳥取県米子市中町２０
印　　刷　（有）米子プリント社